

愚

神



不

夫夫  
員



愚

神



来

賛

イリヤスフィールのせいで、私は……久々にふたりの姉上のことを思い出した。

私にとっては、嫌な思い出。

でも、本当に嫌なら憎んでいいはず。

憎んでいる？ いや、そんなことはない。

苦手ではあるが、憎んではいない。

憎んでいるのであれば、あのふたりをとつとギリシアの番人どもに引き渡している。

姉を守るのには、私だけ。

出来損ないの代わりに力を得た私だけ。

それは、姉上たちを愛していたから。

姉上たちも、私を愛していた。

私は愛されていたのに、何がいけなかったのだろうか。

愛されていたのに、何がいけなかったのだろうか。

怪物になりきる寸前。

私は人を喰った。

元々、私たちの神性は人身御供を欲しています。

ただ、それは信者が行うことで……自らが喰らうなどというのにはあり得ない。

でも、私は喰った。

空腹が……心の空腹が満たされた。

そこから、私は怪物になったのだ。

いや。

元々、怪物だったのだ。

それなのに……私は、神であろうとした。そう振る舞った。

そのしつべ返しに、人喰らいなのだ。

姉上たちと共に、ただ手折られる花であれば良かった。だが、私の中の強さが、それを拒んだ。私

の名前——支配するもの——が拒絶した。私

姉上たちだって、ただ手折られることは無かった

だろう。

上姉さまはステンノ——強い女。

下姉さまはエウリュアレ——遠くに飛ぶ女。

女系の部族……鉄器の一族……大地母神の血族であつたが故、ただでは死なない。

いや、そもそも不老不死である私たちに、死や滅亡が何の意味があつただろう。ギリシアの男たちで

は私たちを亡ぼすことはできなかつたのだ。

どうして滅んだのか。

そんなのは簡単だ。

私が……亡ぼした。

私が、滅ぼしたのだ。愛していた者を、愛していた世界を。

「何を……考えているのだ。もう、終わつたことだ。くつ……イリヤスフィールがあのようなことをしなければ……」

私が喰らつた世界。喰らつて亡ぼした世界。

その世界と、その世界を愛していた姉ふたり。私はそのすべてを喰らい、英雄を英雄たらしめるために、殺された。

世界そのものでありながら、怪物になつていた私を殺せることは無い。

神性介入——それが私を殺した。

私と姉さまの愛した世界が滅び、そして、私が姉さまと共に死んだ。殺された。新興蛮族たるギリシア人の手によつて。

「ふつ……だからどうしたのだ。私が何か考える必要もあるまい」

その通り。私は、私のままであれば、よい。怪物としての私。

国喰らいの私。サーヴァントとしての私。守護者としての私。

「そうとも。私がサクラに仕える理由はそれだけ」

姉ふたりをまもつていたのと同様に……私はサクラを守りたい。何があろうと。例え、叶わずともサクラを守ることは絶対だ。

「サクラは……私の妹みたいなものですからね」

何度か口にした言葉。誰もが違和感なく受け入れてくれるエミヤの家は私にとつて心地よい場所である。

姉さまふたりが、生きていたら……ああ、きつとあざ笑うに決まっています。

「妹を守るですって。メデューサ、あなた言うようになつたじゃない。あなたが守るのはわたくしだよ、分かつているでしょ？」

「嬉しいですって？ そんなことで喜んでるのは、わたくしたちの愛情が足りないと言ふこと。それはわたくしたちへの侮辱よ……分かつているの？」

——口の中が苦くなつた。忘れよう。

多分、私の話は誰も知りたくない。徹底的に忘れよう。

そうだ、今日は図書館に行こう。

そこで、CDを借りて、ずっと本を読んでいよう。

何だつていい。この口の中が、ニガヨモギをはんだように、爛れている状況を忘れるためにも。

「あ、ライダー」

「シロウ……どうしたのですか？」

「え……あ、あのさ……」

後ろに数人の気配——リン、セイバー、それからサクラ。ふむ……何か面倒なことを押しつけられたようですね。

「どうかしたのですか？」

「え……あのさ……その、た、大したことじゃないんだけれど……」

「ふむ……シロウとしては、あまり私に言いにくい話なのですね」

「や、そ、それは……そ、そういうことじゃなくて……えーつと……こ、これを受け取つて欲しいんですよ」

随分、簡単な話ですね。紙バックの中に入っているのは……服。

微かな魔力の残り香。

「え、えーつとさ、その、う、ウチにいっぱい送られてきているんだよ、柳洞寺からさあ」

やはり。

私の好きではない神性の臭い。

魔女——メディアめ。

「これは呪われているのですね」

「やっ！ そ、それは、無い！ そ、その、つ、つま



んない話なんだけれど、ちよつと事情があつて、この服を着てもらいたいわけだ。

「……」

「やあ、わ、買じゃないよ！ほ、本当だつて！

そ、その、桜や凍だつて、着るわけだ。」

「……話が見えてきません。順を追つて話をしてください。」

「これは新都の喫茶店での出来事。」

「あそこにはランサーがいた。本を買つた帰りに何度か立ち寄つた。ランサーが勤務に励んでいるのは良いことだと思つた。」

「そ、それが……そうでもないわけだ。」

「どうやらランサーは店に迷惑を掛けていているようだ。まあ、そこまではいいだろう。」

「しかし、そこにキャスターが絡んできて、ことは面倒になつた。」

「何でも、その喫茶店、店主の趣味で、美味しい紅茶の淹れ方講座をやつていたという。」

「そういえば、月曜の午後から夕方までは休みだつたようだ。」

「まあ、そこで、ちよつと」

「しかし、どうしてシロウが関係するのですか？」

「え……あ、いやあ、まあ、色々」

「大方は読めた、冷やかしに行つたのだろう。リンはキャスターに恨みがある。まあ、どちらかと言えばキャスターの方の恨みが強いだろうが、リンはキャスター戦で、大損させられている。」

「サクラはキャスターの味方だ。妙に懐いている。気にはなることだが、サクラにとつて母性というか、まともな大人の女性はいせぬ奴ぐらいだ。」

「……この街は主婦や大人の女の人材不足である。オージンジオージンジ。」

「セイバーは……茶菓子だろう。まあ、彼女はそういう理屈で動く。安い。安すぎる。」

「……どれぐらゐの損害が出ましたか？」

「えー」

障子の向こうからも声が出た。

こんな分かり易い話はないだろう。誰も好きこのんで、スーパー魔術大戦の真っ直中に飛び込みたいわけではあるまいに。

「え……まあ、ちよつと尋常じゃない金額で」

「リンとキャスターが弁償するべきです」

「ちよ、ちよつと……待つてよ。ま、まだ事情は」

「その組み合わせなら、そのふたりが原因です」

「だ、だから……組み合わせつて、参加している人が誰とか言つてないし」

「当たつているのでしょ？」

障子の後ろで、舌打ちとサクラの「まあまあ」という小声が聞こえる。ふむ……推理小説というのは面白い物だ。

「ま、まあ、そ、そういうことにしておこう。色々な名譽もあるから」

「で、その後始末をシロウがしているのですか？」

「後始末つて程じゃないよ。ランサーが首になるのは可愛そうだし、俺にも原因があるから」

「確かに、リンの挑発、キャスターのやり返し、サクラが止められず、事態が悪化。それは、シロウが最初に殴られておけば済んでいましたね」

「いやあ……俺が殴られてたら、多分、セイバーが何もかもぶつ壊して」

「シフォンケーキに夢中になつていようようなサーバントに大いに問題があります」

障子の後ろで「ぐうっ」と鈍い声。非常にいい気味です。

「で、解決策は？」

「……まあ、無償でアルバイト……それが条件。ただ、ランサーの希望で服の指定が出た」

「服の指定？ 最近流行のメイド喫茶にでもするつもりですか？」

「……く、詳しいなあ、ライダーは」

「本を読み、新聞を読み、ニュースを見ていれば、これくらいは誰でも知つていることです」

「う……す、すみません。他の人は知らなかつたみたいですよ」

後ろで「うんうん」言つているのは、多分リンでしょう。まったく……今の出来事に鈍感なのが機械

音痴の原因だと何故分らないのでしよう。

「要するに、メイド喫茶を一週間くらいやって、その集客で何とかしようということですね」

「ま、まあ、そういうこと……何だよなあ」

「ふむ。で、衣装の手配はキャスターがやって、ランサーとシロウが、裏方なわけですね」

「そ、そう……で、できれば……」

「お断りします」

私のせいではない。私に関係していない。なのに、どうして責任を取る行動をしなくてはいけないのでしよう？

「そ、その、まあ、紆余曲折合つて」

大方反対が出たのだろう。取ずかしいと。セイバー辺りは言いそうだ。キャスターの着せ替え人形扱いされているのが気に入らないのは分かる。

もつとも、口喧嘩であの女に勝てるのは、リンくらしいだから、常に言いくるめられているだろう。柳洞寺のまかない飯で釣られているのも私は知っているのだ。

「要するに、私も巻き込まないと、ダメだということですね。いいではありませんか。エミヤの家としては関係ない話。リンとキャスターが弁償すればいい」

「で、でもさ、止められなかつた俺たちも悪いわけだ」

「私は臨席していません」

ふう……冗談ではありません。

何故、私が女の子の格好なんかするのか……絶対御免被ります。

取ずかしい目に遭う人間が増えれば、それでいい、という底意地の悪さを感じずにはいられない話です。

「じゃ、じゃあ……お、俺が、み、見たいって言うのは……どうかな？」

——ざわっ！

「……シロウ、あなたはどうして、そんなに簡単にデスフラグを立てるのでしょう。今回はタイガースタンブはありませんよ。」

「……魅力的に見えますが……まあ、それは互いの不可侵条約違反になるので、やめましょう。」  
 「そ、そ、そうか……ぞ、残念……」  
 「もう少し理屈があれば、聞きますが」  
 「う……うーん……」

「あるはずがありません。」  
 「ここまで追い詰まってシロウができる手段は土下座ぐらいですが、私に土下座されても、特に感慨深げな点はない。」  
 「それは他の人でも同様。」  
 「やがて、シロウは困った顔をしながら、口を開きました。」

「え……あ……あんまり、使いたくないけど……きや、キャスターから言付けが一つ。どうしても話を聞かないなら……」  
 「ほお、あの企むものが、何を？」  
 「えーっと……私、誕生日のこと、知っているのよ。あなたの姉さんは本当におしゃべりね。」  
 「引き受けます！」

「だ、ダメだ……言葉が出ない。」  
 「何だと……どうして、あの女が私のことを知っている。私の誕生日の話。」

「あ、そ、そう……なの。いや、きや、キャスターに弱みを握られているなら、止めてもいいんだよ。俺たちも、そんな話聞きたくないし。」  
 「そんなことはありません。かの、メディア女王がそのような下衆な真似をするわけがありません。あの人は立派な人ですよ。」

「私は精一杯の笑みを浮かべた。」  
 「殺す。絶対に殺す。」  
 「だが、殺したところでどうなるわけではあるまい。」

「そ、そう……じゃあ、それ着付けてみて、キャスター曰く『何の問題も無い苦よ』って。」

「そ、そうですか。ああ、そうですか。」

「いや、落ち着くのだ、メデューサ。あの女がどれぐらいの話を知っているといるのか。確かに魔術の使い手だが、姉さまと仲がいいなんて話は聞いたことが無い。」  
 「オリンポスの井戸端会議か。それは……あり得るかも知れない。アフロディーテが、呪いの序でに愚痴相手になっていたのかも知れない。」  
 「くそっ！ 落ちつくんだ。」

「じゃあ……俺、外出てるから」

「私は無言でシロウを送り出した。」  
 「そして、袋の中の服を取り出してみる。」

「あ……」

「それは……あの女の言っていたことを裏付ける代物。ぞつとする記憶……それが、私の中で怒濤の如く溢れ出てきたのだった。」



「今日は……私、メデューサの二十回目の誕生日です。大事な記念日です。」

「といつても……誰も祝ってくれる人はいません。ふたりの姉さまは、私の天馬を連れて、オリンポスへ行っていました。」

「今日は一日帰ってこないでしょう。自分の誕生日のために、私は昨日の内にすべての仕事を終えていました。」

「姉さまたちが散らかした服とか、食べ残した残飯の処理とか、あと、久々にやってきた勇者の処理……ともかく、昨日は寝る暇もなく働きまくったわけです。」

「それで、今日の休日を手に入れたわけですが、珍しく朝早くから起こされたのは良かったのですが、結果的に天馬を取られてしまったのは痛い。」

「誰もいない島に行つて、のんびり昼寝でもしようか……いやいや、それで勇者がやってきたら困るが、ベルレフオーンがあれば一瞬で処理可能だし……」

「しかし、いい天気だ。どうしてこうもいい天気なのに気分が晴れないのだろう。」

「そんなのは分かり切っている。私の存在が憂鬱なのだ。」  
 「どうして、こんなに背が伸びたのだろう。」  
 「姉さまと同じぐらいのままでいたかった。」  
 「そうとも。あの誕生日の日から突然、背が伸び始めたのだ。やがて、姉さまたちの、オモチャになつていき、拳げ句こんな世界の果てに流刑させられているわけだ。」

「はあ……溜め息吐いてもひとり」  
 「何がひとりですって」  
 「あら、ステンノ。ひとりでいるのが好きな大女がどうかしたのかしら？」  
 「あら、エウリュアレ。この娘ったら溜め息を吐いていたのよ」  
 「あら、ステンノ。それはいけないことね、何事も教えたはずよ、メデューサ。泣いてはいけない。笑つてはいけない。それがこの失楽園の果ての掟だつて」  
 「今日ぐらいはワガママさせてください」

「今日も。」

「どんな罰でも受けよう。」  
 「今日ぐらいは溜め息を吐いて、カニと戯れたい。」

「やれやれ……出来の悪い妹を持つと大変ね、エウリュアレ」  
 「まったくね、ステンノ。せっかく誕生日プレゼントを持ってきてあげたのに」

「……何？」

「おほほ……さすがに浅ましいエウリュアレの妹。反応が早いわ」  
 「ええ……さすがに貧相なステンノの妹。物欲しそうな顔が似合うわ」  
 「……ほ、本当なのですか」  
 「疑り深い娘ね。あなたのことを今でも思っているポセイドン様から聞いたのだから、本当に決まっているでしょ」

「おほほ……さすがに浅ましいエウリュアレの妹。反応が早いわ」  
 「ええ……さすがに貧相なステンノの妹。物欲しそうな顔が似合うわ」  
 「……ほ、本当なのですか」  
 「疑り深い娘ね。あなたのことを今でも思っているポセイドン様から聞いたのだから、本当に決まっているでしょ」

「おほほ……さすがに浅ましいエウリュアレの妹。反応が早いわ」  
 「ええ……さすがに貧相なステンノの妹。物欲しそうな顔が似合うわ」  
 「……ほ、本当なのですか」  
 「疑り深い娘ね。あなたのことを今でも思っているポセイドン様から聞いたのだから、本当に決まっているでしょ」

「おほほ……さすがに浅ましいエウリュアレの妹。反応が早いわ」  
 「ええ……さすがに貧相なステンノの妹。物欲しそうな顔が似合うわ」  
 「……ほ、本当なのですか」  
 「疑り深い娘ね。あなたのことを今でも思っているポセイドン様から聞いたのだから、本当に決まっているでしょ」

「おほほ……さすがに浅ましいエウリュアレの妹。反応が早いわ」  
 「ええ……さすがに貧相なステンノの妹。物欲しそうな顔が似合うわ」  
 「……ほ、本当なのですか」  
 「疑り深い娘ね。あなたのことを今でも思っているポセイドン様から聞いたのだから、本当に決まっているでしょ」

「おほほ……さすがに浅ましいエウリュアレの妹。反応が早いわ」  
 「ええ……さすがに貧相なステンノの妹。物欲しそうな顔が似合うわ」  
 「……ほ、本当なのですか」  
 「疑り深い娘ね。あなたのことを今でも思っているポセイドン様から聞いたのだから、本当に決まっているでしょ」

「おほほ……さすがに浅ましいエウリュアレの妹。反応が早いわ」  
 「ええ……さすがに貧相なステンノの妹。物欲しそうな顔が似合うわ」  
 「……ほ、本当なのですか」  
 「疑り深い娘ね。あなたのことを今でも思っているポセイドン様から聞いたのだから、本当に決まっているでしょ」



しかし……気になる。プレゼントだと。

ポセイドン——海の神。  
思えばあの男が、今の状況を生み出した元凶だ。  
そういえば……どっかで会った男と似ていたな。  
そうそう、「人稱が『我』で人間のことは『雑種』と  
か言っていた……あんな感じ。」  
姉さまと一緒にオリュンポスに来ていた折、私は  
はぐれてしまい、大変困ったのです。私のはぐれた  
というより、姉さまたちが私を置いてきぼりにして  
しまったことが原因なのですが。  
ひとりりで困惑していると、金びか王子がやってき  
て、「おい、娘！ 我の妾になれえいっ！」とい  
うトンドモナンバでした。

このナンバも後で考えてみれば、姉さまたちの意  
地悪だったでしょうが、金びか王子は私を近くの  
アテナの神殿に連れ込んで、手込めにしようとした  
のです。  
ですが、そこをアテナに取り押さえられ、ポセイ  
ドンの奥方アンフィトリテに呪いを掛けられたので  
す。

それが、今の私なわけです。  
もつとも、後からやってきた姉さまには「ホント、  
デカイだけ取り柄のないバカな妹がもう少し処世  
術というのを心得ていれば、こんなことにはならな  
かったのに！ あなた、アテナ様に暑中見舞いとか  
年賀状とかグリーンディングカードとか金の最中を  
送ったりしなかったの？ しょうがない娘ねえ」  
と、とても時代背景を無視したことを言われたので  
した。

「ともかく、後でポセイドン様からあなたに誕生日  
プレゼントが送られてくるそうよおっ」  
「良かったわねえ、こーんな何にもない場所だと、殿  
方からの贈り物はすっごい慰めになるわー」  
「やだ、エウリュアレ……慰めだつて、いやらしいわ  
ねえ」  
「何を言っているの、ステンノ。いやらしいのは、あ  
の娘よ」  
「あ……あの……で、わ、私に何かご用で」  
「あるから話しているのでしょ……バカな娘ねえ！」  
「ホント、バカな娘」

ステレオでバカバカ言われ続けるのには、すっか  
り慣れてしまいました。  
しかも、今日は誕生日です。もう、別にそれぐら  
いの酷い目は慣れていきますから、いいんです。

「あ……あの……プレゼントつて」  
「おほほ……良かった良かった。そうそう、そういう  
物欲しそうな目をして、話しかけてくるのがあなた  
らしいわよ、そうは思わない、ステンノ」  
「そうね、メデューサだったら、ひとりぼっちだと寂し  
くてすぐ死んじゃうくせに、こういう時に甘えるの  
が下手だものねえ、エウリュアレ」  
「あ……あの……」

私を挟んで、姉さまふたりは「おほほ……」と笑  
い続けるだけ。  
私はどっちを見るわけでも無く、天を見上げてオ  
リュンポスの神々、特に金びか王子に呪詛をぶつけ  
ました。多分、届かないけど。  
どうして、ウチの姉さまたちに出会ったのです。  
どうして、今日が私の誕生日だと教えたのです。姉  
さまたちはすっかり忘れていて、今日一日は、遊び  
まくろうと思っていたはずなんです。

何しろ、遊び道具とか、私のイジメのネタになる  
ようなモノは昨日の内に処理しているのですから  
……それなのに、どうして！  
「あら、エウリュアレ。この娘ったら嬉しくて泣いて  
いるわよ」  
「ホント、ステンノ。可愛い妹よねえ、私たちがプレ  
ゼントを買ってきたことに大喜びなんて……やっぱ  
り妹は妹だわ」  
「でかくて」  
「無闇に太つて」  
「何の仕事もできない」  
「ただの穀潰しなのに」  
「どうして、こんなに可愛いのかしらあ♥」×2

そう言つて、姉さまは私の顔を挟んで、スリスリ  
するのです。でも、力の加減とかしないので、どっ  
ちかっつていうとヘッドロックを掛けられているよう  
なモノです。  
それでも、結構嬉しかったりします。

「さて……じゃあ、エウリュアレ」  
「そうね……ステンノ」  
「は……な、何を……」  
「いいから黙ってなさい。色々買ってきてあげたん

だから！」

「そうよ、今日はあなたが主役なんだから！ さあ、  
さっさと服を脱ぐ！」  
「ちよ、ちよつと……ね、姉さまあつ！」  
「あら、やだ……この娘ったら、またおっぱいが大き  
くなってるわ」  
「どれどれ……ホント！ どうしたことかしら……  
やっぱり頭が悪くなっている証拠よね」  
「いつそのこと、アマソネスのようにおっぱい切り  
落としたらどうかしら？」  
「そうね、今度試してみよう。そうすれば、胸へ  
行くはずの栄養が、脳に回るかも知れないわ」  
「や、や、やめ……て……ください……そ、そん  
なあ、恐ろしいことお」  
「冗談よ、メデューサ。あなたのおっぱいを切り落と  
したって面白くないわ」  
「そうよ、メデューサ。あなたのおっぱいは切り落と  
しても生えてくるから」

神様……私は何なのでしようか。  
「さてさて……このいやらしい服を脱がせて……あ  
らん？ 何この可愛いパンティは？」  
「そ、それは……ね、姉さまのお下がりの」  
「やだわ、エウリュアレ。この娘ったら私のお古の下  
着を穿いているわ！」  
「ホント！ 何処の貧乏人なの！ 何がどうしてど  
うなったらそんな真似ができるの！」  
「だ、だって……わ、私の下着は、もうボロボロで  
……。それなら、使い古しのをあげるわつて、上姉さ  
まが……」  
「ああ、この娘ったら本当にバカな娘ねえ……冗談  
に決まっているでしょ。大体、これは燃えるゴミの  
日に出したはずでしょ」  
「はあ……幾らウチの暗黒神殿のお布施が少ないか  
らつて、あなたに下着を買い与えない程、貧乏じゃ  
ありませんよ！」  
「はあ……」

「何よ、その気のない返事は……まったく、今日買っ  
てきた服に合せて下着も一緒に買ってきて良かったわ  
たわ！ 私の判断は正しかったわね、ステンノ」  
「そうね、私、間違っていない。でも、今度オリュン  
ポスに行ったらメデューサの下着もまとめ買いしな  
くてはね、エウリュアレ」  
「そういえば、あの百何とかショップつていう所の

だから！」

「がよろしいのではなくて、ステンノ」  
 「まあ！アソコね！一度も入ったことがない店だから楽しみだわ！」

「何でしょう……すっごい勢いでオモチャです。でも、逆らえませんが。だって、私の四肢にふたりが絡みついてるんですから。」

「さあ、可愛いパンティも又ギ又ギしましょうねえ……まったく、似合うと思ってるの、あなたに」  
 「そうよお、メデューサ。あなたには、私の下着は似合いません。あなたが似合うのは、ニンフ共が穿くようなはしたない下着です」  
 「そ、そんなあ……わ、私だって……か、可愛いのに無理！絶対に無理！」x2

「酷い。どこまでいじめれば気が済むのでしょうか。」

「あら？知らないの。私が、エウリュアレが大人になれば、あなたのことはいじめないわ」

「そうよ。私が、ステンノが、大人になれば、昔のことを悔いるようになるの。そう、あの時『ボクシングしようぜえ！』って言いながら、座布団を巻かれて一方的に殴ったり」

「予約したガンブラを買いに行かせるけれど、自分の欲しいアイテムは買わせてもらえなかったり」

「私の部屋に行くためには、あなたの部屋を通らなくってはいけなくて、プライベートがゼロだったり」

「そういうのを悔いるのは——」  
 「私が大人になった時！もつとも、大人になんかならない不老不死なのですけどね！」x2

「まさに外道。酷いです。」

「というより、私はそんなことされた覚えが無いのですが……多分、今のが世の中の末っ子の末路なのでしょう。」

「さあ、全部又ギ又ギし終わりましたねー」  
 「ちよつと鑑賞しましょうか、エウリュアレ」  
 「そうね、ステンノ」

「やつと私の身体から姉さまたちが離れます。慌てて、身体を隠そうとするのですが、姉さまの怒号が許してくれません。」

「私たちは鑑賞するって言っているのですよ！まったく、言葉まで分からなくなつたのですか……」

「しようがないわよ、エウリュアレ。だって、この娘、バカなんですよ」  
 「そうね、ステンノ……さあ、ぱっぱと、何もかも晒してしまいなさい！」

「私は仕方なく……裸を晒しました。」

「もう姉さまたちと一緒に風呂にははいりませぬ。ですから、裸を見られるのは、本当に久々でした。」

「ふん……生意気な身体しているわね。ソリヤ、ポセイドン様も騙されちゃうわよ」  
 「アテナやアンフィトリテもバカよねー。ウチの妹に嫉妬するなんて……何考えてるのかしらー」

「仕方ないわよ、エウリュアレ。確かにウチの妹は出来が悪くて、こんな身体しているけど」  
 「ふんふん」  
 「アイツらつたら、老けちゃうのよ！この娘以上の速度で！まったく出来損ないの神様って言うのは辛いことー」

「まったくそうね、ステンノ。この娘も老けるけれど、あの人たち程じゃないし、あの金びか王子のポセイドン様ぐらいの人なら、この娘でも十分すぎるぐらい奥方がつとまるものねー」

「嫉妬深いって怖いわ。まあ、その嫉妬深さを回避できないほど出来の悪い、処世術のシの字も知らないような私の妹もどうかしているのは確かねー」  
 「まったく！ほら、もつと、おっぱいを持ち上げてみなさいよ……何よ、そのただの脂肪の塊は」  
 「そ、そんなあ……こ、これは、し、仕方のないことですよ……」

「ふん。そんなに肥大化したモノなんですから、母乳ぐらい出るわよね？」  
 「で、出ません！わ、私、懐妊……してませんか」

「あら残念。てつきりその辺りのブサイク戦士のチンポでも取り出して、遊んでいるかと思つたのに……」

「う、上姉さま！な、何てこと……」  
 「あら、メデューサ。知らなかったの？ステンノはホント、口が悪いのよー」

「あら、エウリュアレ。私が口が悪いのは、エウリュアレのせいよ」  
 「そうかしら？」  
 「そうかしら？」

「見合いながらクスクス笑っている。私をからかっているのです。私は乳房を下から抱え上げるようにして、強調してみせるのです。」

「うん。結構……ホント、そういう所はいやらしく育っているのね」  
 「後は、下半身もチェックしましょう……ほら、股を開いて……そうそう、そのまま腰を落として……いい格好ね。素晴らしいわ、メデューサ。そんなはしたない格好を見せるのは、上手いのねー」

「ブリッチシながら……私はすべてを晒しています。恥ずかしくは……ありませんと言え、大きな嘘です。」

「ただ、姉さまたちの目が見えないのが……本当に恐いのです。どんな表情をして、どんな感情を抱いているのか……分からないからです。」

「そうねえ……私がどんな顔をしてどんな表情をしているか、分からないと恐いわよねー」  
 「でも、教えて上げないわ。あなたの特殊な能力をもっと強めれば見えるんじゃないの？」

「邪眼の力の一つは、探知です。邪眼を封印している状態でも、探知することはできます。でも、それはあくまでも視線に入ること。目は目として機能しているのですから、M字開脚ブリッチでは……視線を向けることができないのです。」

「しかし……まあ、何ていいましょ……ねえ、エウリュアレ」  
 「そうね、ステンノ。何て言えばいいのかしら」  
 「うう……ね、姉さまあ……」  
 「黙ってなさい……あらあら……うふふ♥」  
 「ホント……クスクス♥」

「姉さまたちは双子……いいえ、完全同一体です。」

「うん。結構……ホント、そういう所はいやらしく育っているのね」

「後は、下半身もチェックしましょう……ほら、股を開いて……そうそう、そのまま腰を落として……いい格好ね。素晴らしいわ、メデューサ。そんなはしたない格好を見せるのは、上手いのねー」

「ブリッチシながら……私はすべてを晒しています。恥ずかしくは……ありませんと言え、大きな嘘です。」

「ただ、姉さまたちの目が見えないのが……本当に恐いのです。どんな表情をして、どんな感情を抱いているのか……分からないからです。」



だから、本当は会話など必要ないのです。  
姉さまたちが何を、どんな感想を抱いているのか……私にはさっぱり分からない状態です。  
ただ……取部を、陰部を、全開にして……晒している……はしたない行為だけ。

「さて……もういいわ、メデューサ。その目障りな身体をしまいなさい」

「う……はい、はい……」

「さあ……ここからはお着替えよ。私が着替えさせて上げるわ」

「いいえ、ここは、私が着替えさせてあげる」

「じゃあ、ふたりで着替えさせましょ……ねえ、エウリュアレ」

「そうね、ふたりで着替えさせるのがいいわね、ステ」

「何恐いこと考えているのかしら……メデューサってば」

「ホント、姉の心、妹知らずよねー」

私に反論の余地はいっぱいあるはずです。  
ホント、いっばい。

でも、姉さまたちがキラキラした視線を私に浴びせている限り、そんなのの意味はないと、私は理解しているのです。

「さあ、まずは下着ね！ さすがに下着を穿かせなくて……始まりませんものね！」

「うふふ……こちらの見立てはステンノがしたんですよ。ありがたいでしょ……」

「は……はい……あ、ありがたうございます」

「ふふふ……ちゃんとブラジャーもあるのよ……ちよつと変わっているけれど」

ちよつと変わっている……いいえ、トンでもなく変わっていました。  
それは乳房を下から支えるタイプのブラジャーで、娼婦が好んで装着するようなものです。

「あら、気に入らないの？ セツかく上下のお揃いになるように買ってきたのに。結構探す之大変だったんだから」

「まったく、あなたのおっぱいがでかすぎるから、散々苦勞して探したんですよ……感謝こそされ、不愉快にされる覚えはありませんよ！」

「まあまあ、エウリュアレ・メデューサは戸惑っているのですよ……何しろ、私たちのお古しか着たことがないのですから」

「そうね、ステンノ、お洒落を知らない田舎モノじゃあ、仕方ありませんわね」

そんな田舎モノになってしまったのは……いや、これは私のせいでした。そう、こんな辺境に追放されなければ、そんな呪いさえ掛けられなければ……問題は無かつたのでしょうけれど。

「はいはい……じゃあ、洋服を着ましょうね……さてさて、これはどう着るんでしょうね？」

「この娘のおっぱいがでかすぎますからね……やつぱり、上から無様に着るのが正解ですね、エウリュアレ」

「あら、そうなの。まあ、セットした髪がグシヤグシヤになっちゃうじゃない。ステンノ、これはどうしたらいいのかしら」

「そうね、終わってから適当にまとめてあげましょう。どうせ、この娘のセットされていない髪なんかどうでもいいことです」

「そうねそうね。どうでもいいことね」

私の頭の上からばつさり布が覆い被されてしま

います。  
これぐらいの布であれば、私の視力を奪うことはありません。それでも、ちよつと不快な感じは否めません。

「あ……あの……こ、これは……」

「可愛い服でしょ……うふふ」

「私が選んだのよ、決めたのはエウリュアレだけだ」と

「そうね、決めたのはステンノだけれど、エランなのは私ね」

こんなひらひらした服を着たのは、初めてで……ちよつと戸惑います。

しかし……こんなのを着たからといって何か変わると思えないのですが……私の場合。

「だから、こうするのよ……目を瞑ってなさい。あなたの眼は物騒なんだから……分かってる？」

「は……はい……目を瞑りました。これで……魔眼は使えません」

「よろしい……さあ、あなたに似合うようなアクセサリーを用意したから、それを着けたら、目を開けていいわよ」

「……はい」

何か私の顔に押しつけられます。  
金属製の……何か。

「いいわよ……目を開きなさい。さあ、ここからが本番ね……いい、エウリュアレ」

「大丈夫よ、ステンノ。さあ、この鬱陶しい髪をまとめ上げないと……」

「ちよ、ちよつと……ね、姉さま。そ、それは……危険です」

そうです。  
私の髪の毛は、私以外の者が触ると、急に不機嫌になるのです。そして、髪いかり、絞め殺したりすることもあります。

「大丈夫よ……あなたの手癖の悪い髪の毛のことは十分承知しているわ。だから、特別にダイダロスに作ってもらった眼鏡があるのよ」

「そうよ、これは、エウリュアレが選らんで、私が決めたの」

「素敵でしょ。これは魔力を封じるの。これを描けている間は、あなたは、ただの人間。そう、身長が高いだけの、だらしない人間よ」

「あ……はあ……」

「さあ、さつさと髪を整えてあげましょうね」

そうして、姉さまたちは、私の髪の毛をまとめ、セットアップを終えてしまいます。姉さまたちが言っている通り、髪は大人しいままでした。

「さあ、鏡をご覧なさい。可愛いわよ……メデューサ」

「あら、エウリュアレ。可愛いなんて言葉がこの娘に



「似合うの？」  
 「あら、ステテンノ、可愛いという言葉が似合わなかつたら、この格好は何て言うのかしら」  
 「そうね……可愛い、かしら？」  
 「そうでしょ……可愛い、でしょ」

「そうして鏡を見せられます。私の力が反射することはありませんが、私は鏡が好きではありません。姉さまたちは明らかに違う体付きにがっかりするからなのですが。でも、そうして引き出された先で見たのは……確かに私でした。私ですが、私では無いよう……ちよつと戸惑わずにはいられません」

「うふふ……見てよ。この娘の戸惑い面。どうしたの、そんなに間抜けな面しちゃってえ」  
 「ホント、面白いわよ……メデューサ、あなた、そんなに呆気にとられるような顔しなくてもいいのよ」  
 「やだ、この娘だったら、私たちの声が聞こえてないのかしら？」  
 「聞こえてないとしたら、お笑いだわ。自分の姿を見て石にでもなってしまったのかしら？」  
 「そ……そんなこと……あ、ありません」

「やつと私は返事ができませんでした。実際、私は自分に飲み込まれていたのかも知れません。それを認めるのは、非常に難しいことではあるのですけれど。」

「さあ、メデューサ？ どう？」  
 「ど、どうと……申しますと？」  
 「分かっているわねえ……私たちが選んだ服はどうなのよ？」  
 「え……あ……か、可愛いとお、思います……はい……正直、嬉しいです」  
 「あら！ そう！ 気に入った！」  
 「あはは！ そうなの！ 気に入ったの！ それはそれは……良かったわあつ」

「な、何を……」  
 「黙っていないさい。それがその服を着た者の定めな

「んですから！」  
 「な……何ですか、こ、この服は……」  
 「……うふふ。ご主人様に絶対忠誠の、メイド服よ……分かる？ メイド服」  
 「わ、分かりません！ だ、だって……た、単に可愛い服」  
 「愚かねえ……メデューサ、あなたは分かっている。私たちが、ただ可愛い服を誕生日に着せると思っているの？」  
 「そ……そんな……だってお祝いするって」  
 「そんなこと言ったの、エウリュアレ」  
 「そんなこと言ったの、ステテンノ」

「ふたりはシンクロして首を横に振りました。プレゼントをあげるわ……と言ったけれど、祝うなんて一言も言っていないわよ」  
 「そ、そんな……ひ、酷いです……」  
 「酷くないわよ、メデューサ。あなたに可愛い服を着て貰って……今日はあなたに奉仕して貰うんだから」  
 「ほ……奉仕い！」  
 「そうよお……最近、あなたに奉仕して貰って無いからあ」

「姉さまたちは、舌なめずりしながら、私の身体を撫で回していきまます」  
 「やあつ！ か、勘弁……勘弁してください！ ほ、他のことは、他のことは何だつてします！ ほ、奉仕だけは……わ、私、こ、壊れてしまします……」  
 「あはは……そんな女の子みたいな悲鳴上げても似合わないわよ」  
 「そうよ。デカイ女がそんな悲鳴上げたら笑われるわよ。実の姉が可愛がってあげるって言っているの……んも、ワガママなんだからあ」

「どっちがワガママなのでしょう。私の女としてのプライドをズダズダにする行為がワガママでないとしたら、この世の全ての偽満は許される苦です！」

「そうね……許されるわね。ミダス王のような最低の偽満だつて、神は許したのだから……私たち姉妹の願いが許されるのは」  
 「当然よお……うふふ」  
 「眼鏡のせいで、私本来の力が出ません。姉さまの細い腕でさえ、私を押し抱くのは、容易くなっています。は、早く……め、眼鏡を外さないで。」  
 「眼鏡、外したら酷いわよ」  
 「ひいっ！ で、でも、きよ、今日、ま、また勇者が来たら」  
 「今日は来ないわよ。ポセイドン様にお願ひして、海を思いっきり荒らしておいたから」  
 「そ、そんな……」  
 「それに来たら来たで面白いことができるわ。あなたを犯して貰うっていうのは……どうかしら？」  
 「や……やです……」  
 「じゃあ、私たちが犯された後、あなたに後始末をして貰うっていうのはどうかしら？」  
 「そ、そんなのお！」  
 「うふふ……興奮するわよねえ。泣き叫んでいるあなたの前で泣きながら辱辱される双子の姉。その後よお……ソイツに言わせてあげるからあ」

「おい、役立たずのデカ女。せめて、姉に申し訳ないと思つたら、その役立たずの口で綺麗にしてやつたらどうだ？」  
 「ああんっ♥ ソクソクするわあつ♥」  
 「うふふ……メデューサも、お姉ちゃんの使用済みオマンコを慰めたいでしょお？」  
 「そ、そんなことお……あ、ありませんっ！ ね、ね、姉さまたちは……こ、高潔で高貴であらねば……」  
 「何を言ってるんだか。私たちは、そんなの、望んでいなくても思つたの？」  
 「確かに、エウリュアレの言うとおり。私たちが、それを望んでいるのであれば、あなたの所に何か来ないわよ……それくらいは分かっているでしょう」  
 「……」  
 「そうです……分かっています。だとしても、私はそれを受け入れるわけにはいかないのです。姉を守るべき、妹として、出来損ないの妹として。」







「だから、今日は……あなたを慰み者にしてあげる。そうされることがどれだけ大変か……たつぷり分かってあげてよ」

「そう……ステンノの言うとおりに。あなたは愛され、恵まれしもの。あなたの力が何の意味を持ち、何故そうなったか……それが分かれば、あなたは嘆く必要は無い」

そうして……姉さまふたりの指が、私の身体の敏感な場所へと……潜り込んでいくのです。

「あらあら……さすがのメデューサも、こういう責めには弱かったのかしら？」

「身体は鉄でできており、髪の毛は蛇、恐るべき腕力を振るいて、人を喰らう——なんて言われているけれど、本当は可愛い女の子」

「可愛いですって、エウリュアレ……何処が？」

「可愛い……こんなところが」

いきなり、下姉さまの指が、私の背中……感じやすい部分を「つうううっ♥」となぞっていくのです。

「あひいっ♥ だ、だめえ……な、何をおっ♥」

「あひいっ、だめえ……ですってえっ♥ 面白い」

「なるほど……確かに可愛いわね。メデューサの可愛くていやらしくていじめたくなる声、癖になるかもね」

「や、やめ……止めて下さい、う、上姉さまも……そ、そんなことお」

「あら？ 私が何するか、分かっているの？」

「す、すか、スカートの中に手を入れてる段階で、ど、どうか……していただけますっ」

「ふーん……そうなの。じゃあ、こうしたら、どうなるのかしらっ！」

「うう……それはあ……」

「あら？ あらあら？ まさか……犯ってないの？ しょうがない娘ねえ……まったく誰に似たんだか、この処世術の無さは」

「ホント……ちゃんと犯って、ちゃんと慰謝料を請求すれば、こんな辺鄙な場所に来なくても済んだの……しょうがない娘お♥」

決して姉さまたちの声は、私のことを卑下していません。その声は喜びに満ちています。出来の悪い妹が……未通娘であること、その事実の確認ができる……そんな歪んだ喜びを感じるのです。

「やーねー、歪んだ喜びだなんて」

「そうよ、メデューサ。あなたが純潔であることは本当に嬉しいのに……まったくしょうがない娘お♥」

そういつて上姉さまは、私の内股に舌を這わせていくのです。足を閉じようにも、人間程度の力しか出ない今の私では、非力とはいえず神である上姉さまの力にかなう苦もないのです。

「んあううっ♥ う、上姉さまあ……だ、ダメです……そ、そんなことお……されては、き、汚いですうっ」

「聞いた、エウリュアレ？ 汚いんですって……お風呂に入れてあげなかつたのは失敗かしら？」

「そうかしら、ステンノ？ この娘をいじめるには丁度いいのではなくて？」

「さすが、私ね……エウリュアレ。やっぱり、あなたは私の半身」

「何を言うの、ステンノ。この娘の味をたつぷり味わって……私にも伝えて頂戴」

そうして、ふたりの姉さまは私の身体に舌を這わせていくのです。トロトロ……トロトロ……いやらしい舌の這う感触に私は震えていることしかできませんでした。

「あらん？ どうしたのメデューサ？ いつもなら、私たちに聞き分けない言葉を浴びせるじゃない」

「そうよ、メデューサ。あなたの可愛い罵詈雑言を期待しているのに……どうしたことかしら？」

「うう……強情ね、メデューサは」

「じゃあ、止めましょう。この娘も嫌がっているし……」

「そうね、ステンノ」

「うう……強情ね、メデューサは」

「じゃあ、止めましょう。この娘も嫌がっているし……」

「そうね、ステンノ」

「うう……強情ね、メデューサは」

「じゃあ、止めましょう。この娘も嫌がっているし……」

「そうね、ステンノ」

「うう……強情ね、メデューサは」

「じゃあ、止めましょう。この娘も嫌がっているし……」

「そうね、ステンノ」

「うう……強情ね、メデューサは」

「じゃあ、止めましょう。この娘も嫌がっているし……」

「そうね、ステンノ」



姉さまの指が、わ、私のお……お、お尻にいっ……  
くうんんっ♡

「うふふ……いやらしい娘ねえ♡ お尻の穴をほじ  
られて、そんな可愛い声出してえ♡」

「あら……エウリュアレ、どんな感じ？」

「ん……キチユキチユよ、この娘の穴♡ 早く騷  
り物にしたいわぁ♡」

「いやらしいのね、エウリュアレ……私もそんな風  
に言われると……感じるわぁ♡」

「んじゃ、メデューサには、エウリュアレの口づけも  
してあげなくちゃね……」

「それだったら、ステンノが不浄の穴ぁ……ケツ  
穴ぁ……ほじりい、してあげるわぁっ♡」

私は抗議の声を上げました。でも、すぐに下姉さ  
まの唇……そして、甘い液体が喉を潤し……私の敗  
北を決定づけるのです。

「うふふ……準備完了お♡」

「私たちと違って、あなたは無意味にデカイから、二  
本は平気よねえ♡」

「な、何ですか……い、今のはぁ……」

「ヘルメス様から貰ったの、太古種である、私たちに  
は強烈なフラッシュバックを起こすって言うていた  
わ」

そ、そんな！ まるで毒では！

そんなものを、姉さまに勧めたオリュンポスの神  
に、私は激しい怒りを感じました。

でも、その怒りも私の身体に起こっている反応の  
前では、ほとんどん意味をなさなくなってくるので  
す。

私は、自分の身体を抱きかかえて、理性を強く持  
とうと思いましたが、と、特に、ち、乳房に……乳頭  
に、激しい違和感を覚えているのです……どうした  
ことでしょうか？

「うふっ♡ もお、効いてきたのね、分かるわ……私  
だってピンピン、キてるものおっ♡」

「私もよお、メデューサぁ♡ あなたの、キテー  
る場所お、私に、ステンノに、弄らせなさいっ♡」

そうして、姉さまに襲いかかられ、私はなすすべ  
もなくオモチャになっていくのです。

やがて、姉さまの手が私の乳房に掛かります。  
姉さまの指が、私の敏感な場所を握っていくので  
す……だ、ダメです……ち、力が……は、入らな  
なっっちゃうっ♡

「あらあら……気持ちいいのねえ♡ でもお、もっ  
と気持ちよくなるわよ」

「そうよ……もつともつと、意識してご覧なさい」

姉さまに言われると……興奮が止まりません。  
意識が、乳首に集中します。

だ、だ、だめえっ♡ こ、こんなのにい……こん  
なのにいっ……こ、興奮しちゃあ♡

「うふふ……びっくんびっくんしてきたあっ♡」

「バカおっぱいのくせに、いい感じじゃない……こ  
のエロおっぱいいい♡」

「そうね……こういうイジメをする時には、すつご  
く向いているわね。どう？ いじめられて……嬉し  
いでしょ？」

「やあっ！ だ、だめえ……だめえっ……んんっ♡  
そ、そんなに……そんなに……い、いじ、いじめ  
ちゃ……だ、ダメですうっ♡」

「何がいじめちゃダメですうっ……よ、こんないや  
らしいおっぱい……ああん、もおっ♡ ねえ、エウ  
リュアレ……どう、そつちの揉み心地は？」

「ええ、ステンノ、すつごいわ……まるで、深海のク  
ラーケンを揉んでいるみたい。それぐらい、グニユ  
グニユしてるわ……いやらしい♡」

「んんんっ……そ、そんなの、い、言わないでえ  
……だ、だめえっ……は、取ずかしいっ♡」

私は頭を振って、姉さまたちの行為から逃げよう  
としたけれども……立っているだけでやっとの私で  
は、何もできません。

「うふふ……気持ちいい？ 気持ちいいわね……  
もつと素直な顔になりなさい」

「あっ♡ んあっ♡ んああっ♡ だ、だめえっ  
……だめえっ……んんんっ♡ くうんんっ……ん  
んふあああああっ♡」

だ、ダメだ……こ、こ、こんなの……こんな  
のお、こ、興奮しちゃ……だ、だめっ……ダメだっ  
わ、私……私……お、おか、おかしくな  
るっ♡

「素直にならないの？ じゃあ、もつともつと気  
持ちよくしてあげる。ねえ、ステンノ……こうやっ  
て、見たらあ？」

「あ……いいわねえっ……うふふ♡ さあ、覚悟し  
なさいっ♡」

姉さまたちは、両手で乳房を抱え、両手の親指で、  
乳首を持ち上げます。そして、その親指で、乳首を  
ゴリゴリと愛撫していくのです。

「んんんおおおおっ♡ お、お、だ、だめえっ♡  
だ、だめえっ♡ んんおおおっ♡ か、か、硬  
くう……硬くう……な、なっっちゃうっ♡」

「ホント……すつごいわぁ……いやらしい♡ 乳  
首がこんなに勃起しちゃうなんてえ♡」

「このバカなサイズのおっぱいには、丁度いいぐら  
いの乳首よねえ……うふふ♡ ちよつとした男の子  
のチンポぐらいになっっちゃうわねえ♡」

「ステキい……スケベ過ぎるわぁ♡ こんなにいガ  
チガチにしてえ……服から飛び出しそう……そんな  
感じよおっ♡」

私は思わず目を背けてしまいます。私の乳房が  
……乳首が……こんなに變形してしまうとは思いま  
せんでした。

自分で、見てもいやらしいと感じています。でも、  
これを姉さまたちにオモチャにされるのは……  
ちよつといただけまし。

でも……今の私には何もできないのです。  
そればかりか……私の中に、変化が起こってしま  
した。その変化は……私にとって屈辱的であること  
は間違いないのです。

「え……ああっ……な、何いっ……だ、だめえっ♡  
な、何かぁ……で、出ちゃうっ♡ 出ちゃう  
うっ♡」

「ヘルメス様のお薬はねえ、飲んだ娘が欲求不満だ  
と……身体に変化を起こしちゃうんですってえ♡  
……身体に変化を……メデューサは欲求不満ですわ  
よっ」

「あらあ……そうなのねえ♡ メデューサは欲求不  
満なのねえ♡ じゃあ、私たちの前で……いや  
らしい姿を晒しなさいっ♡」



次の瞬間、私は悲鳴を上げて、絶頂感を味わいました。それは胸から……乳房から噴き出したもので……感じたのです。

「あはは……出た出た♥ すっごい……おっぱい出たわよ、エウリュアレ」  
「ホント、出たわね♥ うふふ……凄いやね。しかも勢いがある……この服を通して母乳が噴出しちゃうなんて……いやらしい娘ねえ、メデューサ♥」

「うふふ……そんなに泣かないの。可愛い顔が台無しよ……ほらほら」  
「んんああおとおっ♥ だ、ダメですうっ♥……し、しこつちゃあ……だ、ダメですうっ♥」  
「ん……可愛い声え♥ メデューサって感じると本当に可愛い声になるのね……いつも、こんな声出すなら、いじめるのも張り合いがあるのにな」  
「そ、そんなあ……ああっ♥ んおっ♥ おおおっ♥ き……きも……」  
「ん？ 聞いた、エウリュアレ？ 今の。きも……って何かしら？」  
「ええ、聞いたわ、ステンノ。きも……って気持ち悪いの略かしら？」  
「だとしたら、もつと意地悪なことしないとおおほほ♥」  
「ち、ちが……違いますうっ！ い、い、いじ、意地悪……し、しな、しないでえ……くださいいっ……んんんっ♥」

「うふふ……そんなに泣かないの。可愛い顔が台無しよ……ほらほら」

「んんああおとおっ♥ だ、ダメですうっ♥……し、しこつちゃあ……だ、ダメですうっ♥」

「ん……可愛い声え♥ メデューサって感じると本当に可愛い声になるのね……いつも、こんな声出すなら、いじめるのも張り合いがあるのにな」

「そ、そんなあ……ああっ♥ んおっ♥ おおおっ♥ き……きも……」

「ん？ 聞いた、エウリュアレ？ 今の。きも……って何かしら？」

「ええ、聞いたわ、ステンノ。きも……って気持ち悪いの略かしら？」

「だとしたら、もつと意地悪なことしないとおおほほ♥」

「ち、ちが……違いますうっ！ い、い、いじ、意地悪……し、しな、しないでえ……くださいいっ……んんんっ♥」

「うふふ……そんなに泣かないの。可愛い顔が台無しよ……ほらほら」  
「んんああおとおっ♥ だ、ダメですうっ♥……し、しこつちゃあ……だ、ダメですうっ♥」  
「ん……可愛い声え♥ メデューサって感じると本当に可愛い声になるのね……いつも、こんな声出すなら、いじめるのも張り合いがあるのにな」  
「そ、そんなあ……ああっ♥ んおっ♥ おおおっ♥ き……きも……」  
「ん？ 聞いた、エウリュアレ？ 今の。きも……って何かしら？」  
「ええ、聞いたわ、ステンノ。きも……って気持ち悪いの略かしら？」  
「だとしたら、もつと意地悪なことしないとおおほほ♥」  
「ち、ちが……違いますうっ！ い、い、いじ、意地悪……し、しな、しないでえ……くださいいっ……んんんっ♥」

「うふふ……そんなに泣かないの。可愛い顔が台無しよ……ほらほら」

「んんああおとおっ♥ だ、ダメですうっ♥……し、しこつちゃあ……だ、ダメですうっ♥」

「うふふ……そんなに泣かないの。可愛い顔が台無しよ……ほらほら」

「んんああおとおっ♥ だ、ダメですうっ♥……し、しこつちゃあ……だ、ダメですうっ♥」

「ん……可愛い声え♥ メデューサって感じると本当に可愛い声になるのね……いつも、こんな声出すなら、いじめるのも張り合いがあるのにな」

「そ、そんなあ……ああっ♥ んおっ♥ おおおっ♥ き……きも……」

「ん？ 聞いた、エウリュアレ？ 今の。きも……って何かしら？」

「ええ、聞いたわ、ステンノ。きも……って気持ち悪いの略かしら？」

「だとしたら、もつと意地悪なことしないとおおほほ♥」

「ち、ちが……違いますうっ！ い、い、いじ、意地悪……し、しな、しないでえ……くださいいっ……んんんっ♥」

「うふふ……そんなに泣かないの。可愛い顔が台無しよ……ほらほら」

「んんああおとおっ♥ だ、ダメですうっ♥……し、しこつちゃあ……だ、ダメですうっ♥」

「ん……可愛い声え♥ メデューサって感じると本当に可愛い声になるのね……いつも、こんな声出すなら、いじめるのも張り合いがあるのにな」

「そ、そんなあ……ああっ♥ んおっ♥ おおおっ♥ き……きも……」

「ん？ 聞いた、エウリュアレ？ 今の。きも……って何かしら？」

「うふふ……そんなに泣かないの。可愛い顔が台無しよ……ほらほら」

「んんああおとおっ♥ だ、ダメですうっ♥……し、しこつちゃあ……だ、ダメですうっ♥」

「ん……可愛い声え♥ メデューサって感じると本当に可愛い声になるのね……いつも、こんな声出すなら、いじめるのも張り合いがあるのにな」

「そ、そんなあ……ああっ♥ んおっ♥ おおおっ♥ き……きも……」

「ん？ 聞いた、エウリュアレ？ 今の。きも……って何かしら？」

「ええ、聞いたわ、ステンノ。きも……って気持ち悪いの略かしら？」

「だとしたら、もつと意地悪なことしないとおおほほ♥」

「ち、ちが……違いますうっ！ い、い、いじ、意地悪……し、しな、しないでえ……くださいいっ……んんんっ♥」

「うふふ……そんなに泣かないの。可愛い顔が台無しよ……ほらほら」

「んんああおとおっ♥ だ、ダメですうっ♥……し、しこつちゃあ……だ、ダメですうっ♥」

「ん……可愛い声え♥ メデューサって感じると本当に可愛い声になるのね……いつも、こんな声出すなら、いじめるのも張り合いがあるのにな」

「そ、そんなあ……ああっ♥ んおっ♥ おおおっ♥ き……きも……」

「ん？ 聞いた、エウリュアレ？ 今の。きも……って何かしら？」



上げていきます。それから、さつきと同じように、乳房を一緒に搾り上げていきます。  
すると、また母乳が激しく、噴き出すのです。姉さまふたりの顔に、私の母乳がぶちまけられているのです。母乳は量も多く、勢いもよく、ふたりの顔に激しく飛び散っていくのです。

「どお……いやらしいでしょお♥ 男の子のチンポから噴き出すのは、これによく似ているのよ……うふふ♥ わかるう？」

「うふふ……奥手のメデューサに分かるわけ無いでしょ……チンポから社の子種汁がピューピュー出て……女の子の顔に掛けるの。それが、男の子は大好きなのよお♥」

そんなこと、想像もしたことがありません。もちろん、股方が欲情し、情欲を満たした結果、そうした行為に至るのは、知識として知ってるだけです。だから……姉さまたちが、言うようなことを知っていたか、経験していたか、と言えはまったく違います。

「うう……うう……」

「そんな情けない顔しないのお……ほらあ、舐めてみなさい♥ あなたの出したものですかね、メデューサ♥」

「そうそう……自分の出したミルクなんだから……うふふ♥ ほらあ……ね♥」

顎の下から滴り落ちる、私の母乳。

さつきは、無理矢理飲まされたこともありまうから、気にも留めていなかったのですが……よくよく考えれば、懐妊もしていないのに、母乳がでるのは……どう考えても、薄気味悪いものです。それを……吸るのは……ちよつと、抵抗感があります。

「何よ……汚物だとしても、言うの？」

「そんな風に思っているなら……トイレで陵辱すれば良かったかしら？ その方がメデューサへのエッチになつて良かったかもね」

「そうね！ そうね！ トイレで搾乳して、イカせればいいわね！ さすが、ステンノ！」

「うふふ……無理矢理便器に母乳を搾られる、メデューサの姿はいいわよ、エウリュアレ。とつても、

いやらしいわ」

「や……やですう……お、おね、お願いですう……そ、そんなことお」  
「じゃあ、あなたが顔射した母乳を舐め取るのは、妹として当たり前のことでしょう？」

「さあ……舐め取りなさいっ」  
私は震えながら、姉さまの顔の卑を舐め取つていく。じゆるじゆると音を立てて、自分の母乳を吸ると……私の中に新しい快楽が生まれているのを感じます。

私は、その快楽と戦います。この快楽に負けてしまつては……私の尊厳がとことんまで失われてしまうのですから。どうあつても……耐えなくては。

「うふふ……我慢していても、無駄よ。次の段階に入っているって気付いていないのかしら」

「気付いていないわよお、だって……この娘、バカですもの」  
「な……何のことですつ」  
「決まつてるじゃない……コレよっ！」

そう言つて上姉さまは、私のスカートの前を抑え込む。丁度股の中を抜けるように、上姉さまの腕は突き進みました。私のスカートが見慣れない形に隆起しているのです。

「あなた、本当に分かつていなかつたのねえ……しよりのない娘♥ でもお、それだけおっぱい射乳の方が気持ちよかつたのかしら？」

「そんなわけないわ。自分の変態に気付いていないだけ……それとも、メデューサは最初から、こうだつたのかしら？」  
「それは言い過ぎよ、ステンノ。幾ら、神代から綿々と続く私たちでも、神酒の力を借りなくては……なしえないことよ」

「そうね、エウリュアレ。分かり切つていたことだけれど、この娘は特別だから……もしかしてつて思つたのよ」

「うふふ……鉄器を扱う以上、そうした象徴があつてもおかしくないけれど、私たちに無いんだから……無いのよ」

「そうね。そうね」

姉さまたちは、何を言っているのでしょうか。そして、私のスカートを隆起させているのは……私に自覚がないのか……いや、違います……私はずつと自覚していたのです。

それを何とか、殺していたのに……姉さまたちの責めが、私を結局現実に引き戻してしまつたのです。

「あらあら……泣きそう。そんなに悲しいの？ 取ずかしいの？ メデューサつてば」

「うふふ……取ずかしいのでしょおね。そりゃ、そりゃね……こないやらしいの、おつ勃てて……いやらしいとは思わないの」

「な、な、なんで……すかあ、こ、これは……」  
「あら、見て……ああ、見えないから分らないわね。でも……握つたら、分かるんじゃない？」

上姉さまは、私の股間で起立したものを握りしめようとしました。そうされるのは……いけないと、私は感じ、腰を引きました。

「あらん？ 分かつていないんじゃないか？ どうして腰を引くのかしら？」

「う……うう……わ、分らないけれど……その……こ、恐い……ですうっ」  
「恐いの？ ふーん……あなたの戦士としての嗅覚が、こつやつて腰を引かせているのかしら？」

「わ、分かりません……で、でもお、だ、ダメ……だと……思うからあ……」  
「ふーん、エウリュアレ……」  
「ええ、ステンノ」

私の腰をしっかりと下姉さまが抱き留めます。  
「やあ、やあつ……だ、だめ……だめえっ！ だ、ダメですううっ！」  
「うふふ……だーめっ♥ 迷がさないわ……さあ、大人しく股間の一物を弄らせなさいっ」  
「ほらほら、逃げないのおつ……うふふ♥」



でも、そうして……一番されなくなかったことを  
されて、私は激しく粗相をしてしまうのです。

「んんんああああああああああ♡ ら、ら、らめええ  
ええっ♡ んんんひひひひひひひひ♡ んんんおおお  
おおおおおおおおおおおおおお♡」

「ぶびゆるうううううううううううううううううううう♡  
ぶびゆるうううううううううううううううううううう♡  
うううううううううううううううううううう♡ びゅうううう

激しい絶頂感——いいえ、そんな言葉で言い表せ  
ないほどの快感。こんな解放……いや、放出感はある  
り得ません。

「んあっ♡ んあっ♡ んあっ♡ んんんんん……  
んんんああああ♡」

「え、何……どうしたの、ステンノ」  
「この娘、最低……イッちゃったのよ」  
「え……イッちゃったの？ 何で？ どうして？  
エウリュアレに分かるように言って」

「ステンノにも分らないわ。ただ言えることは、こ  
の娘は、私にスケベチンポを弄られて、いいえ……  
握られただけで、絶頂しちゃったってことよ♡」

「えっ！ ほ、ホントだあっ！ 見てよ！ スカー  
トの前のもっこりから、染み出てるよおっ♡」  
「うふふ……本当ねえ♡ いやらしいわ」

絶頂感……いいえ、もう分かっていることですか  
ら、こう言い変えましょう——射精感。

その射精感に、私は揺蕩っていました。  
だから、自分の身体が自由になったのに、気付か  
ないで、姉さまたちの前で痴態を晒していたのです。

「まったく、買ってきたばかりの服う、こんな風に染  
み付けちゃってえ……しようのない娘おっ♡」  
「本当お……いやらしいすぎだわあ♡ スカーツの内  
布まで貫通させちゃうなんて……なんてザーメンの  
量なのかしら」

「あああっ！ だ、だめっ！ だ、ダメですうっ！  
気付けば姉さまたちは、私のスカートの隆起に顔  
を寄せて「くんくん♡」しているのです。

「あああっ！ だ、だめっ！ だ、ダメですうっ！  
気付けば姉さまたちは、私のスカートの隆起に顔  
を寄せて「くんくん♡」しているのです。

な、なんてことおっ！  
「なんてことおっ、それは私の台詞よ、メデューサ？  
あなた、誕生日プレゼントに、なんてことした  
の？」

「そうよ。まさか、勝手にチンポ勃起させて、勝手に  
射精して、それで、言う言葉は『なんてこと』なの？」  
「そ、そんな……わ、私には、そ、そんなものお……」  
「生えてるじゃない……うふふ♡ こんなにバキバ  
キに勃起させちゃったのが……ほらあっ♡」

下姉さまが、私の……べ、ペニスを……ああ、こ  
んなのお……指で摘まんているのですう。  
し、信じたく……ないですが……これは、間違い  
なくペニス……男根……チンポなのですう。

「うふふ……さすがにたっぷり抑圧されているメ  
デューサのチンポは、かなり大きいわ。ザーメンの  
量もかなりのものだし……素敵ねえ♡」  
「しかも、さつき出しまくっていた母乳同様甘った  
るい臭いさせて……私を喜ばせようって、魂胆なの  
ねえ♡ ホント、いやらしいすぎよっ」

「あ……ああ……これもお、これもあ、あ、あ  
れえ……あれ……さつきのあ、く、葉のせいなので  
すかあ……」

「そんなの決まってるじゃない……ホント、鈍い娘  
ねえ。私たち、地母神の神性を持っているのに、こ  
んなのあるわけじゃない」

「うふふ……でも、やっぱりこの娘、メデューサね。  
支配する女っていうだけあって、男性因子が強い  
ねえ……こんな欲求不満チンポがガチガチに生え  
ちゃうなんて……最高よおっ♡」

でも、だとすれば……姉さまたちにも。  
「勿論。後でたっぷり楽しませてあげるわ。うふふ  
……嬉しいでしょお♡」  
「そうよお♡ ステンノのも、エウリュアレのも、一  
緒に楽しんでもらうんだから……うふふ♡」

私は震えました。  
快楽への恐怖もあります。

でも、それ以上に、姉さまたちにまで、こんな足  
まわしい代物が生えてしまっているという、怒りに  
も似た憤り。

分かっていきます——それ  
だつてフェイク。  
私の中にあるのは、この背徳  
的快楽への期待と希望……それ  
が、身体を震わせる原因なのです。

「んんんあうっ……だ、だめえっ、ね、姉  
さまたちまでえ……そ、そんな風に……な、  
なつてるのおっ……だ、ダメですうっ♡」  
「うふふ……そんなに驚かないの、私だつて……  
ガチガチ勃起したチンポの扱いに困っているんだか  
ら。エウリュアレは……どうなのかしら？」

「ステンノと一緒に……すっごい切ない気持ちに  
なつてるのお♡ 興奮してえ……パンティからはみ  
出しちゃいそうお♡」  
「メデューサのチンポははみ出しちゃつてるのかし  
らあ……うふふ♡」  
「確かめないとねえ……うふふ♡」

私は必死でスカートを押さえつけようとしまし  
た。こんな痴態を見られるわけにはいきません。  
疑ら、姉さまたちでも、こんなことおっ……！

「後で私のを、いじらせてあげるわ♡」  
「あら、ステンノがそうするなら、私はしゃぶらせて  
あげる……味わってみたいでしょお、お姉ちゃんチ  
ンポお♡」

ソクソクとした興奮が私の中を駆け上がっていき  
ます。力を込めていた腕は、易々と持ち上げられ、  
スカートの捲り上げられてしまします。

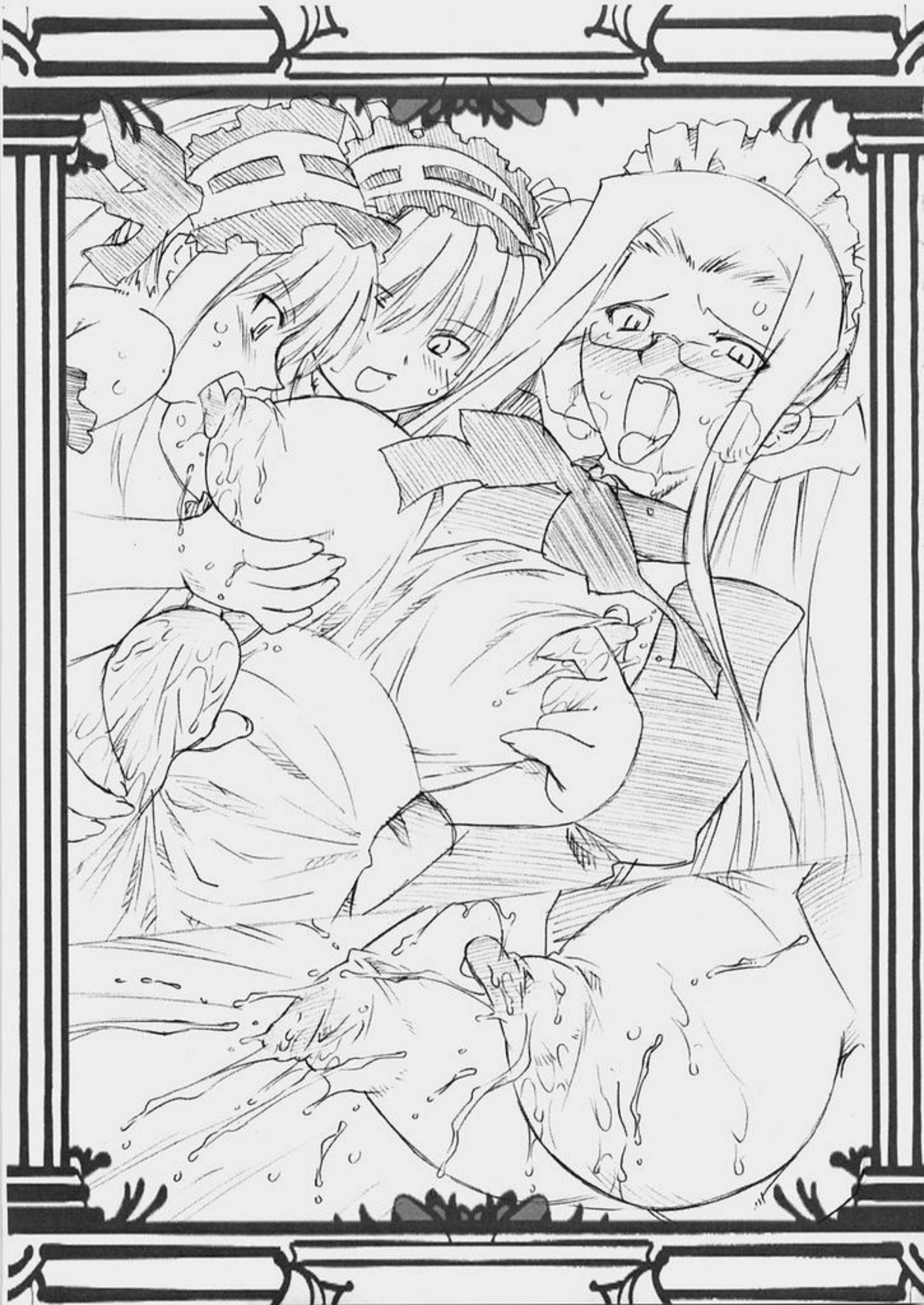
「まあっ！ な、何てことかしら！」  
「あはは……ホントおっ♡ すっごいわ、メデュー  
サ……あなたつてサイコーよおっ♡」

スカートをもとめ上げられて、私の視界も開けま  
す。私の……股間にどんな変化が起こっているのか  
……

「ひっ！ な、な……なんです……か……そ、それえ  
……ああっ……」

私が見たもの……それは紛れもなく男根……ペニ  
ス……ああ……チンポおっ♡

私が見たもの……それは紛れもなく男根……ペニ  
ス……ああ……チンポおっ♡







「濃くてえ……んんちゅうっ♥ んんちゅうっ♥  
「んんっ……んちゅうっ♥ お、美味しいのおっ♥  
さ、サイコーよお……メデューサー♥」x2

私はクラクラしてしまいました。  
あの気丈で、強くて、気高い……私の姉さまたちが……あ、あのように、ふ、ふ、不浄の……汚物とも言える……わ、私のお、ざ、ザーメン……んああううっ♥ ち、チンポ汁う……な、舐め取ってえ……よ、喜んでいるううっ♥

「うふふ……見てよ、メデューサーのあの顔お♥  
そんなに私たちがいやらしいことお、するの、驚くことかしらあ？」  
「メデューサーの前でしてこなかっただけなのにねえ……うふふ♥ 可愛そうなメデューサー……殿方に愛されない可愛い私の妹」  
「だから、私が、エウリュアレが愛してあげるねえ……可愛いメデューサーあ♥」

私は声も出せず、姉さまたちの陵辱を受け入れるしかなくなっていました。  
理性も、これまでの常識も、無意味になりつつあります。快楽——それも恥辱にまみれたもの……それだけを欲しているようになってきているのです。

「あ……ああ……ね、姉さまあ♥  
「もっとお……して欲しいのお？」  
「あ……うう……ううっ……そ、それはあ……  
「いいのよお……すぐに言えるわけも無いですからねえ……うふふ♥ じゃあ、あなたのチンポの味をためさせて欲しいんだだけお」

ぎよつとしました。  
いくら何でも……いきなりです。  
恥辱高き快楽を欲しているも、姉さまの悪意と興味に満ちた視線の前では、理性と経験が阻んできません。  
それに……愛されるだけの女神に、邪神と蔑まれ、怪物と恐れられる、妹のチンポお……しゃ、しゃぶっつてもらうなんて……そんなのお。

「嬉しいんでしょお♥ お姉ちゃんのお口をお……女神のお口をお……このいやらしい蛇で犯したい♥ あなたの……怪物で、お姉ちゃんのお口を騷り

ものにした……そうでしょお？」

「そ……そ、それはあ……  
「いいのよお……メデューサーあ♥ あなたは、それをしていいのお♥ あなたはあ、支配する女、なんだから……あなたこそお、こういう男根で……私たちを、御すべきなのよおっ♥」  
「どお？ メデューサーあ……私たちに、自由意志をぶつけてご覧なさい♥ そうして……自分が守ってきたものを、自分の意志でぶち壊してご覧なさい♥ どれくらい……気持ちいいかあ、お姉ちゃんか……確かめてあげるううっ♥」

「そうよお♥ もちろん、一回じゃ済まないものも……分かつているわねえ♥ もうひとりもいるんだから……たっぶり、試すのよお♥」  
私の勃起したチンポに、姉さまの甘ったるい吐息が掛かります。その吐息の感触でさえ、私には射精しそうなほど、気持ちいいものなのです。  
私のチンポを挟んで、姉さまたちは、嬉しそうに……そして、愛情した表情で、唇を開けたり、舌なめずりをしたり、歯を立てる真似をしたり、そんな挑発を繰り返すのです。  
もう、二回も絶頂したのに、私のチンポは強欲にも、更なる快楽を欲して、「どっくんっ♥ どっくんっ♥」と痙攣していました。

「うふふ……先汁う、出てきちゃったあ♥ 可愛い包茎チンポお♥」  
「ホントお……こんなに、デカイの……包茎い♥ いやらしいわあ……メデューサーらしいけれどお♥」  
「そうねえ……引っ込み思案のくせにい、いやらしいことお、大好きい♥ 可愛い妹のお……変態チンポおっ♥」

私は我慢できず叫びました。  
「あつ……あああつ……だ、だめえっ！ が、我慢……で、できませんっ！ ね、ね、姉さまあ……しゃ、しゃぶ、しゃぶつてえ……く、下さいいっ♥」  
「人にお願する時は、それなりの言い方があるつて、舐めているでしょお……さあ、言っつてご覧なさいいっ♥」

上姉さまが、発情しきった顔で、鼻息も荒く私に

要求してきます。でも、姉さまの発情以上に、私も興奮しているのです。  
私は、舐けられた通りに言葉を並べます。

「あつ……あああつ♥ お、おね、お願い……が、あ……あ、あり、ありますううっ♥ で、できのお……わ、悪い……へ、変態い、欲求不満のお……ふ、ふたなりい、い、妹のお……ち、チンポおっ♥ ち、チンポおっ……な、な、舐めてえ……舐めてえ……く、下さいませえっ♥」  
「舐めて……欲しいのお？」  
「は、はいいっ♥ ね、姉さまのお……お、お口をお……お、おか、犯したい……で、ですうっ♥ ふ、不慢でできませんんっ！」  
「うふふ……いいわよお♥ じゃ、舐めて……あげるううっ♥ いっぱいい……チンポ汁う、射精するのよおっ♥」

「うふふ……先汁う、出てきちゃったあ♥ 可愛い包茎チンポお♥」  
「ホントお……こんなに、デカイの……包茎い♥ いやらしいわあ……メデューサーらしいけれどお♥」  
「そうねえ……引っ込み思案のくせにい、いやらしいことお、大好きい♥ 可愛い妹のお……変態チンポおっ♥」

「んあああつ♥ んあああつ♥ んんあああああああつ♥」  
「あ……メデューサーあ……あ、あんなねえ……こ、これはあ、酷いんじゃない？」  
「うわあ……ステンノお、べちゃべちゃあ♥ これつてえ……しゃぶるとか、しゃぶらないとかあ、いう話じゃないわねえ」  
「あ……あああつ……だ、だつてえ……だつてえ……き、気持ち……よ、良かったんですうっ♥」  
「唇が触れただけじゃない……まったく、本当にしようのない娘ねえ……さあ、どうしてくれまますかね……」

上姉さまは怒っています。下姉さまはちよつと面白そうにしていますけれど、上姉さまの髪に飛び散ったザーメンを指ですくいながら、舐めとっていました。

「でもお……良かったのかもお。だつてえ、ステン









お陰で……まるで猿のようにセンサーを繰り返しているのです。

「さすがに、ゲーメンもこれだけあるとお……エウリュアレと一緒にナメナメしてもいい感じよねえ♥」  
「うふふ……さすが、私い♥ ステンノお、一緒にしゃぶりましょ♥ チンポお……しゃぶりたくてえ……しよがなかつたのよお♥」  
「私もよお……エウリュアレ♥」

そうして……姉さまは乱暴に、私のチンポを咥えているオナホールを引き抜きました。抜かれたショックで射撃するかと思いましたが……そうはならず、身体がブルブルと震える程度で……止まったのです。

「あらあ……射撃すると思っただのに、我慢強くなつたものねえ♥」  
「大丈夫よお……新しい刺激を加えたら、すぐにどびゅどびゅしちゃうわよお♥」  
「そうねえ……うふふ♥」

ふたりはゲーメンまみれのオナホールを私の顔の前に持ってきました。そして、私に見せつけるのです。

「どお……自分のチンポお、慰めてくれたこの子はあ♥ 良かったでしょお……」  
「あ……あうう……は、はいい♥」

私は……素直に答えました。  
「酷い酷いと思つても……快楽だけは真実です。間違いない、私を楽しませていました。陵辱であつても……これを否定することはできませんでした。」

「うふふ……素直な娘つてえ、好きよお♥ 良かったでしょお……チンポ射撃い♥ メデューサのゲーメンとお、イク時のほしたくない声のお陰でえ……私だつてえ、すっごい興奮しているんだから♥」  
「そうよお……でもお、メデューサにはもつともつとお、エッチなことお、仕込んであげるから、覚悟するのね♥」

そうして、私のゲーメンでネットネットになったオナ

ホールを弄びます。あまりにも大量に出し過ぎたゲーメンが、ホールからこぼれて……糸を引いて滴るのです。  
でも……姉さまは、それを無駄ないとはかりに、舌を突き出して受け止めて見せるのです。

「あ……ああ♥ だ、だ、ダメですう……そ、そのような、ふ、不浄なものお……」  
「不浄だつていうのは、分かるんだあ♥ いやらしい娘お……自分のチンポから吐き出したのにい……うふふ♥」

「そ……そんなあ……ね、姉さまあ、だ、ダメですう。お、おね、お願いですからあ……そ、それをお、お、お口で……も、弄ぶのはあ……」  
「指図は受けられないわよ。だつてえ……あなたのチンポ汁う、美味しすぎるんですものお……うふふ♥」

そうして、姉さまたちは、オナホールの両穴に……唇を寄せていきます。  
ここまでできあがつていない私だつたら……こののは、目を背けていたでしょう。でも、今の私は……こ、このお、い、いやらしい光景をしっかりと見たい——そう思っていたのです。

「うふふ……期待しているわよお、この娘つたらあ、しよのうの娘お♥」  
「可愛そうねえ……お姉ちゃんが自分のチンポ汁吸るの見ないとお、欲情しないなんて……ホント、可愛そうよお、メデューサあ♥」

そう言いながら、姉さまは……私がオモチャにしたオナホールに、唇をびったりさせてから、舌を差し込んでクチュクチュさせていくのです。  
やがて……派手で、いやらしい音を立てて、ゲーメンを啜り始めるのです。

「あ……ああ♥……あああ♥……だ、だめえ♥……ね、姉さまあ♥ そ、そんなのお……そんなのお……い、いやらし、す、過ぎますう♥」

私の制止の声を、ふたりは一瞥だけして、穴から溢れるゲーメンをちゅるちゅると音を立てて啜っていくのです。  
「うふふ……満にゲーメンこつてりい、溜まってる

わあ♥  
「まったく……外に漏らさなければ、もつともつと吸るこ……とができたはずなのに……ホント、しよのうの娘ねえ」

そう言いながらも、私の前で嬉しそうにゲーメンを啜り合う姉さまたち。  
その光景は、発情期のニンフにも似た淫猥な光景そのものでした。

「ん……無くなつてきちゃったわあ」  
「舌を挿れればいいのよお……ほらあ、まだまだ、濃いのお……こびり付いているわあ♥」

姉さまの舌が、あの透明なオモチャの中に、クチュクチュと音を立てながら入り込んでいく……その光景を見ていると、私は興奮し、切なくなつてくるのを感じます。  
私のいやらしい場所を挿れて……貪った穴あ♥  
穴の中に……ね、姉さまたちのお、舌があ……舌があ……は、入り込んで……クチュクチュ……クチュクチュ♥

「うふふ……ほらあ、見て、ステンノお♥ この娘つたら、興奮して自分でチンポ、イジってるわよお♥」  
「あら、いやらしい♥ お姉ちゃんがあなたのゲーメンを味わっているの見て、発情しちゃつたのねえ……可愛そうお♥」

「あ……こ、これはあ……ち、ちが、違いますう♥」  
「ホント、しよのうの娘ねえ……メデューサつて、でもお……分らないでも無いわよお♥ こんな……いやらしいことお、見たこと無かつたでしょお？」

「うふふ……じゃあ、もつといやらしいことお、教えてあげるわ……バカでいやらしい妹のために……」  
そうして、姉さまたちは私の頸を捕まえて、ゆつくりと唇を寄せて来ました。

「まずはあ、このバカでいやらしい妹に……自分の味を味わって貰わないとお……」  
「そうね……そうねえ……あん♥♥ デカイくせいに、可愛い唇♥」  
「あ……ね、姉さまあ♥！ んふう♥」

私は、迂闊にも口を開いてしまいました。そうすると上姉さまの唇が重なってきます。それから、ゆつくりと舌が私の口内へと押し込まれてきて……その後、ねっとりとしたいがらっぽいものが……

「んんふうっ！ んんふううううっ！ んぐうっ！ んんんふうっ！ んんんんおおおおおおううううっ……」  
「んはあ……どお、自分のザーメンの味はあ？ うふふ……ビツクリしてるう？ 不味い？ 不味いかもねえ……メデューサはまだ子供だからねえ……」  
「じゃあ、私がたつぷり味わい方を教えて上げるわ。こうやってえ……」

下姉さまは、自分の指を口の中に入れて……グチュグチュと音を立てて見せます。  
下姉さまが……何をしているか、最初は分かりませんでした。でも、トロトロと溢れてくる涎を見て……やつと何をしているか、理解できました。

「そうよお、エウリュアレがしているのは、あなたのザーメンを掻き回しているのよ？ 自分の唾と一緒にねえ……いやらしいでしょお？」  
「あ……ああ……そ、そんなの……そんなの……の、のま、飲ませ……ないでえ……」  
「うふふ……分かってきたじゃない。さあ、口を開きなさい、メデューサ。あなたが期待していたとおり、いやらしい神酒を飲ませてあげるからあ……」

私は口を閉じようとした。でも、下姉さまの強い指の力に負け、口を開いてしまうのです。そうして……下姉さまと私のザーメンが混じり合ったモノが……ゆつくりと糸を引いて流れ込んでくるのです。  
それを吐き出そうと必死になりますが、そんなことをすれば氣道に流れ込んで、むせ返るだけ。黙って……私は口の中に、ドロドロのモノを溜めていくしかありません。

「うふふ……我慢してるわあ……可愛い……さあ、キスよお……んちゅうっ……」

下姉さまも容赦なく……長い舌を差し込んで行きます。クチャクチャと音を立てて、私の口内は犯されていくのです。  
そして、吐き捨てたかった汚液も……無理矢理味わわされ、飲み下してしまいました。

「あっ……ああっ……ああっ……だ、だめえっ……こ、こんなのお……こんなのでえ……こんなのでえ……か、感じちゃ……だ、ダメえっ……」  
「うふふ……見てよお、これえ……完全に反り返っちゃったあ……可愛い……自分のザーメンとお姉ちゃんの唾で、こんなに勃起させちゃって……ホント、メデューサはいやらしい娘お……」  
「そんなに、私のキスは良かった？ 良かった？ 良かったわよねえ……こんなにチンポ反り返らせてえ……えいっ……」

下姉さまは、私のチンポを踏みつけました。射精こそしませんでした。これも、私の中で新しい快感を生んでいました。

「うふふ……いやらしい、足踏みで、そんな切ない顔しちゃうなんて……メデューサは本当にいやらしい娘なのねえ……」  
「いやらしい娘には、もつともつと躰して上げなくちゃ……さあ、立ちなさい」

私は無理矢理姉さまたちに立たされます。でも、腰や膝に力が入りません。笑えばなしなのです。

「ほらあ、どうしたのお。私たちよりも、無意味にでかい図体をしてるんでしょ。気張リなさいよ……」  
「そうそう……ああ、でもお……足はみつともないまま……いいわよお……そうそう……がに股が似合うわあ……」

そうして、姉さまたちはさつきまで舐め回していたオナホールを私の手に握られました。

「思う存分、センスリしなさい……好きなことを口走って……好きなように、射精するのいいわ」  
「そう……そうしないとお、メデューサ……壊れちゃうからねえ……」

な、何のことでしよう……わ、私にはさっぱり分からないままです。  
でも……こ、こんなに勃起したのお、し、鎮める方法は快楽のみです。  
私は大人しく従いました。

「んん……んあああ……い、いいですう……お、おな、オナホールでえ……せ、センスリい……センスリいっ……す、好きいっ……好きですう……」  
「じゃあ、始めましょうね……エウリュアレ、先にどろぞ」  
「え……いいのお、ステンノお、いつもだったら、絶対譲らないじゃない」  
「さつき弄っちゃったから、いいのよ。思う存分、犯して上げて……この娘、感度最高だから」

そうして、上姉さまは私のお尻を撫で回していきます。な、何を……するのでしょお……？

「こうするのよ……でもお、センスリは続けてなさい……気持ちよすぎて飛んじゃうわよお……」  
「じゃあ、いただきますう……メデューサあ、壊れちゃったら、ごめんなさいねえ……」

私のお尻を撫で回していた上姉さまの指がお尻に食い込みます。そして、お尻の肉を左右に開いていきます……カ一杯。  
それから、下姉さまが……か、顔を……お、お尻の割れ目に入れて！ 入れて……だ、だめえっ！

「だ、ダメええっ！ だ、ダメええっ！ い、イヤあああああ……」

悲鳴は上がりました。でも、動けません。

下姉さまの唇が、舌が、私の排泄器官を……あ、愛撫していくのを、黙って甘受することしかできないのです。

「うふふ……予想通りい……」  
「ねえ……ホントお……」  
「な、何が……ですかあ……こ、このようなことお……」











「で、しかも……もつともつと遊んでから」  
 「いいのよおつ……こんなに、いやらしい穴あ……  
 もつともつと黷りたいじゃないのおつ」

姉さまたちは……何を話しているのだろう。私の  
 位置では、見ることはできない。でも、話している  
 内容から……私を辱めることなのは、間違いないの  
 です。

「……壊れちゃうかもよおつ」

「大丈夫よ……この娘の力を考えれば、大丈夫」

「壊れても再生するわよおつ」

「そうね！ そうね！ じゃあ……挿れちゃいま  
 しょうねえ」

「……と……こと……え、メデューサ、あなたは、お尻を自  
 分でこじ開けるの。いい、思いつきりよお……頑  
 張ってねえ」

「そ、そんなのお……そ、そんなのお……うううつ  
 ……む、無理ですうつ」

「もつともつと……気持ちいいこと、したいんで  
 しょお……したくないのお？」

私は……それを態度で示すしかありませんでし  
 た。姉さまの言うとおりに、お尻の穴が広がるように  
 ……こじ開けてくのです。

「じゃあ……こつちは、またエウリュアレがしてあ  
 げるわあ……うふふ……そろそろ皮むきしてえ、舐  
 め回してあげるからねえ」

「え……ああっ！ し、下姉さまあつ！ だ、だ  
 めえつ……そ、そんなのお……そ、そんなのおおつ  
 ……んんんんんんんんっ」

「悲鳴を上げるのは……ここからよおつ！」

——どぬうううううううつ！

アヌスへの衝撃。  
 凄まじいほどの快楽。  
 私はチンポが絶頂したのも、分からなくなるほ  
 ど、激しい絶頂です。  
 お尻の穴が……一気に倍になってしまったような  
 ……衝撃でした。

「んんん……す、すつこい……いっばい……で、  
 出ちゃったわよおつ……メデューサあつ」

「あ……ああおつ……な、何を……し、したのです  
 かあつ」

「うふふ……すつこいでしょお……今、ねじ込んだ  
 のはあ……張り形……チンポの形をしたオモチャ  
 よお……さっきのオナホールが、オマンコの形のオモ  
 チャ……」

「嬉しいでしょお……どつちのオモチャでも遊べて  
 ……本当に気持ちよさそお」

そ、そんなのお……あ……あああ……お、おし、  
 お尻い……す、すつこい……ひ、広がっていま  
 すうつ……あ、足があ……が、ガクガクしてえ……  
 と、閉じれないいっ

「うふふ……分かったでしよお……でもお、まだよおつ  
 ……まだあ……押し込んで……引っこ抜いて……そ  
 れを繰り返すのお」

「そ、そんなのお……だ、だ、だめえつ……こ、こ、  
 壊れちゃううう……」

「大丈夫よお……うふふ……さあ、見せてえ……ケ  
 ツ穴あ……メデューサの……エロエロの穴あ……う  
 ふふうつ」

ふたりの姉さまは……私の後ろに回り込んで、お  
 尻の穴を徹底的に始めました。  
 ただ、声を上げて……その責め立てに耐えていく  
 だけです。

「んんおおおおおおおおおつ……おおおお  
 おおおつ……そ、そんなにい、お、おし、押し込ん  
 じゃあ……」

「そうねえ……じゃあ、引き抜きましょうねえ」  
 「んぎひいひいひいひいひいひい……だ、だ、だ  
 めえつ……な、中あ……中身があ……で、出ま  
 すうつ……で、出ちゃいますうううつ」

「あらあ……じゃあ、この膨らんだ粘膜は、直腸が引  
 きずり出されちゃったせい？ うふふ……大丈夫  
 よお、メデューサあ……あなたの括約筋の強さな  
 らあ、すぐに元通りよおつ」

——ずじゅうつ……じゅるうつ……じゅぶうつ  
 ずじゅううつ……じゅるうつ……じゅぶうつ

私が漏らした口からの悲  
 鳴。それに合わせるように、お尻  
 の穴も……腸液を噴き出すとい  
 う悲鳴を上げていたのです。  
 そうして、いやらしい響きが奏でら  
 れるたび、姉さまは嬉しそうに笑うので  
 す。

「あはは……ホント、期待以上よお。メデューサあ  
 ……素敵い」

「私の妹が……こんなにも淫らで、こんなにも可愛  
 らしいって思えて……私、幸せよお」

「うふふ……さあ、今度は回しながら、ねじ込んでみ  
 ましよおつ……ねえ、ステンノおつ」

「そうね……こんなにたくさんいやらしい汁を溢れ  
 させているんだから……も、大丈夫よねえ」

「ら、らめえつ……んんおおおおつ……おおおつ  
 ……そんなにい……そ、そんなにい、い、いじ、い  
 じめちゃあ……だ、ダメですうつ……ち、チンポお  
 ……ひ、響くうつ」

「大丈夫よお……チンポに響かせるために……させ  
 ているんだからあつ、気持ちいいでしょお……ほ  
 らあ……もうちよつとよお」

「半分……そうそう、ここくらいまではあ、挿れて欲  
 しいなあ……入るよねえ……入ったら、ずっぼんつ  
 てえ……引き抜いてえ」

ま、まだあ……お、奥にい……は、は、入る……  
 なんてえ……そ、そんなのお……だ、だめえつ……  
 んんんのおおおおおつ

「あはは……すつこいすつこい……チンポがバキ  
 バキに勃起してるう……すつこいわよおつ……ほ  
 らあ、もう少しいっ」

「感じてるう？ 自分のケツ穴が、ミチミチいいなが  
 らあ……犯されるのおつ……うふふ……変態の妹の  
 バケの皮を剥ぐのは……本当、楽しいわよおつ」

「ゆ、ゆ、ゆる、許してえ……ほ、本当にい、本  
 当に……こ、こわ、壊れてえ……し、しまい、しま  
 いますううつ」

「うふふ……これでえ、終わりよお……ここが、真  
 ん中でえ……一番太い場所よお……どう？ 感じ  
 るう？ 裂けそうなほど、ミチミチいつてるう？」





「リオカズをあげるわあつ♡」  
 「そうよお……たつぷり私たちの取ずかしい姿を見  
 ておくのねえ……うふふうつ♡」

「そう言つて……姉さまたちは、互いの腰を抱きま  
 した。それから……ゆつくりとその隆起したポイン  
 トを、押しつけ合い始めるのです。」

「んんああつ……だ、ダメよお、エウリュアレえ♡  
 そ、そんなにい……ら、乱暴にいしちゃうあつ♡  
 痛いぐらいじゃないの♡」

「ごめんない、ステンノお♡ でもお、興奮してえ  
 ……すっごい興奮があ……止まらないの♡」  
 「分かるわよお……だつてえ、できの悪い妹の前  
 でえ……こんな取ずかしいことお……しているんで  
 すもの♡ 私だつてえ……取ずかしいからなの  
 よお♡」

「んんんんつ……先汁う、出るの、感じるう♡  
 うふふ……染みが店がっちゃうわねえ♡ んんん  
 んつ……もつとお……出さないとお、又ル又ルしな  
 くてえ……気持ちよくないわあつ♡」

「姉さまたちは、互いの腰を抱きながら、器用にへ  
 コへコと腰を動かしています。」

「そのたびに「びちゃつ♡」とか「ちゅびつ♡」と  
 小さな粘着音を立てて、粘液が染みていくのです。  
 その染み出した粘液が、薄いブラウスの布地を好  
 かし始めると、隆起させているモノがうつつすらと見  
 えてきます。」

「ちよつと……赤みがかったピンク色です。」

「んんんつ♡ み、見えてえ……きちゃつたあつ♡  
 は、はみ出してるの……分かれちゃううつ♡  
 「し、しょうがないわよお……メデューサのお、いや  
 らし過ぎたんだからあ……んんんんつ♡」

「で、でもお……エウリュアレとお、こ、こんなこ  
 とお、するの……初めてよねえ♡」  
 「そうねえ……ステンノの気持ちいいの、すぐに  
 分かるから……必要なかったの……」

「でもお、でもお、こ、これえ……いいよお♡ パ  
 ンパン増幅されて……私のお、気持ち良くなる  
 よお♡」

「うんつ♡ うんつ♡ 分かるう……分かるう……  
 んんんつ♡ 今度はお、ステンノがあ……出し  
 たあつ♡ 汗う……出たでしよお♡ 漏らし

「ちゃつたでしよお♡」  
 「ええ♡ 漏らしたわあつ……つびゆうつ、つてえ  
 ……勝手にヒクヒクしてえ、出ちゃつたの♡」  
 「いやらしいわねえ……ねえ♡」

「姉さまたちの行為が、どんな意味を持っているの  
 か……私の理性は理解できずにいました。」  
 「でも、それを知っている部分が、勝手に反応し、  
 その反応に私の身体は支配されているのです。」

「うふふ……ほらあ、見てえ♡」  
 「んんあうつ♡ メデューサつたらあ、いやらし  
 い♡ センズリい、始めちゃつてえ……」

「ね、姉さまのお……いや、いやらしい♡  
 いやらしいですう♡」  
 「うふふ……可愛い妹お♡ お姉ちゃん同士のエッ  
 チ見てえ、我慢できなくなつちゃうの？」

「うう……は、はい♡ が、我慢……で、できな  
 いですう♡ もつとお、み、見せてえ……下さ  
 ない♡」

「いいわよお……エウリュアレ、メデューサの顔の  
 前でしよお♡」

「そうして、姉さまは私の顔の前で、その行為を始  
 めるのです。」  
 「今度お、ハッキリと聞こえます——ちゅつ♡  
 ちゅつ♡ ちゅつ♡ くちゅつ♡ ちゅつ♡ く  
 ちゅつ♡ ちゅびつ♡ ちゅびつ♡」

「んんんつ……み、見られてるわあつ♡ 妹にい  
 ……いやらしい、妹にい……こんなのお♡」  
 「んんんんつ♡ い、いい♡……いいわあつ♡ み、  
 見られるの、さ、最高にい……か、感じるう♡」

「ね、姉さまのお……姉さまのお……み、見たい  
 ……見たいですう♡ な、生でえ……み、見た  
 い♡」

「……は、はしたない娘ねえ♡ ダメよお……ま  
 だあ……ダメえ♡」  
 「そうよお、メデューサあつ♡ 我慢……な、なさ  
 い♡」

「姉さまたちは、隆起したモノを押しつけたまま、  
 身体を抱き合い……ブラウスの中に手を入れ、乳首

を握ねています。  
 唇を重ね、互いの舌を吸  
 い合いながら、再び隆起したモ  
 ノを押しつけ合つて……エッチ  
 しているのです♡」

「んんああつ♡ んんああつ♡ ね、  
 姉さまのお……姉さまのお……に、匂い♡  
 あ、甘いお……甘い……匂い♡」

「まあ……メデューサつたら、鼻がいいのねえ♡  
 しようのない発情妹のために……ちよつとだけ、味  
 わわせてあげましょうねえ♡ ねえ……エウリュア  
 レえ♡」

「ええ……分かつたわ、ステンノお♡」

「姉さまは互いに身体を離して、隆起したのを私の  
 □元に持つてくるのです。」  
 「私は口を開け、舌を突き出して、それそのものを  
 しゃぶるつもりでした。」

「ダメよおつ……あなたに、直接突つ込んだら、噛み  
 切られてしまいますわよお♡」  
 「そ、そんなあ……しゃ、しゃ、しゃぶりたいで  
 すう♡ しゃ、しゃぶ……しゃぶらせてえ……  
 しゃぶらせてえ♡」

「ダーメッ！ まつたくう……ちゃんと出す時に、  
 たつぷり飲ませてあげますからねえ♡ 今は……こ  
 ういうことよお♡」

「上姉さまは、下姉さまのを。  
 下姉さまは、上姉さまのを。  
 隆起した先端に溜まつている先走り汁を指でコネ  
 コネしながら、すくつて。」

「さあ……舐めなさい。分かつてるう？ これは、ス  
 テンノの味よお♡」

「あ……ああ……んんちゅつ♡」  
 「んつ……うふふ、ほらあ、言つた通りじゃない  
 ……指だつて噛み切りそうなほど吸つちやつてえ  
 ……どお、ステンノの味はあ？」

「あ……ああ……ああ……あま、甘いですう♡  
 「じゃあ、今度お……エウリュアレのおお汁です  
 よお♡」  
 同じように私は舌を巻き付け、唇で吸い上げ、齒







「んんぎひいいいいっ♥ んんおおおおっ♥ ち、チンポお……む、むけ、剥けるうっ♥」  
「ああ……い、いやらしいっ♥ き、亀頭お……見えてきたあっ♥」  
「うふふ……興奮するわあっ♥ どお、メデューサあ……チンポの皮をお、チンポそのもので剥かれるのはあ？」  
「い、いいですうっ♥ い、いや、いやらしすぎますうっ♥」  
「そうねえ……うふふっ♥ 先汁いっぱい出てきちゃってえ……きもちいいでしょお？」

気持ちよすぎます。  
身体の震えとチンポがぶれるのを、抑えるのに死になるほどです。  
スルスルと剥けていくと生臭い臭気が私たちの鼻をくすぐっています。

「あらん？ 生えたらばかりなのに、取垢がついてるわよおっ……どうしちゃったのかしらあ？」  
「あはは……さっきのセンスリで汚れちゃったのよお……いやらしいんだからあ♥」  
「そ、そんなあ……わ、わたしはあ……な、何もお……んんっ♥」  
「くさあいいい……うふふっ♥ そんなにいいじめて欲しかったのかしらあ？」  
「ち、ちが……違いますうっ・わ、私い……な、何にもお……し、して、していませんっ……だ、だからあっ」  
「泣かないのお……後で、綺麗にして上げるから、可愛いメデューサのチンポをお姉ちゃんのおで綺麗に舐め取ってあげるわあっ♥」  
「あ、ズルイ……ステンノおっ♥ 私もお……しゃぶってあげるうっ♥ メデューサのお、チンカスう……全部舐め取ってあげるからあ♥」  
「あ……あああ……そ、そんなことお……し、し……ちやあ、しちやあ……だ、ダメですうっ……し、し……ないでえ……下さいいっ♥ んんんんっ……んんんくうんっ♥」

想像すると興奮が止まりません。  
チンポがビクンビクンして、先走り汁が射精時のザーメンのように「つびゅっ♥ つびゅっ♥」と溢れ出てしまっています。

「ほらあ……やっとお、雁首まで剥けたあ♥ いいわよお、メデューサあ……自分の手で完全に剥いてちやいなさい」  
「は……はいいっ♥ くうんんんんっ……んんんんおおおおおおっ♥ む、むけ……剥けまし……たあっ♥」  
「よくできましたあ♥ うふふ、いいわよお……手を離しなさい、チンポ同士でエッチしてあげるからあっ」

手を離すと、勃起しきつてしまい、お腹に辺りそな程、反り返っています。  
その怒張に、姉さまのチンポが下から迫ってきた。そして、そのまま、亀頭のくびれの辺りに、チンポの先端を押しつけてくるのです。

「んんんのおおおっ♥ ね、ね、姉さまあっ……姉さまあっ……んんんおおおっ♥ い、いいっ♥ いいですうっ♥ いいですうっ♥」  
「ボキャブラリーが貧困ねえ……いい以外言えないのかしらあ？ うふふ……ほらあ、もつと誉める言葉を考えてみなさいいっ」  
「ううっ……だ、だつてえ、だつてえ……き、き、気持ち……いいんですうっ♥ ドックンドックンして……ね、姉さまのお……姉さまのお、鼓動があ……感じますうっ♥」  
「私の方もそうよおっ……メデューサのお、分かるわあっ♥ そんなに心臓バクバクさせて、大丈夫なのお？」

戦闘でも、運動でも、  
ここまで激しい鼓動を体験したことはありません。  
私の中に眠る血が激しい興奮と更なる陵辱を求めていきます。

「本当なら……あなたに犯されてもおかしくないのよねえ♥ でもお、その眼鏡のお陰で……あなたの獣は抑え込まれているわけ」  
「作ったダイダロスに感謝しなくちゃねえ♥ 人間の技術も、究極になれば魔術も同然。うふふ……さすがのメデューサもお、こうなると可愛いふたなり妹よねえっ♥」

ぎゅっ……と姉さまは、私のチンポの雁首に押し

込んできます。根本から一気に先汁が射精感を伴って、噴き出しました。  
でも、姉さまたちも興奮して……自分たちの乳首をこね回しているのです。

「うふふ……メデューサはあ、ケツ穴アクメ体験しちゃったのよねえ♥ そんなに良かったのあ？」  
「あ……あううっ♥ そ、それはあ……そのお……」  
「良かったのねえ……じゃあ、おっぱいをチューチューしてあげるからあ、自分でお尻の穴をこじ開けていじめてご覧なさいいっ♥」  
「メデューサの悲鳴が聞きたいわあ♥ 可愛い可愛い妹の……興奮しきつた悲鳴いっ♥」  
「そ……そんなあ……」  
「口答えは無しよお……ほらあっ♥」

ふたりの姉さまは、いきなり顔を寄せて、私の乳首をコリコリと甘噛みしてくるのです。  
私は泣きそうな声を上げて、仰け反りました。

「ダメよおっ……チンポお、離れちゃううっ♥」  
「ほらあ……腰は前に出して……そうそう、いい娘ねえ……うふふ、ほらあ……ここお、裏筋よおっ♥」  
「気持ちいいでしょおっ？」  
「んんんおおおっ……す、すごお、すごお……うううっ♥ も、もつとおっ……んんんくううううううっ♥」

姉さまたちは、夢中になって私の乳首を吸います。吸われるたびに、今まで溜まっていた母乳が噴き出し、姉さまたちの喉を潤すのです。  
私は意を決して、お尻に手を回しました。  
姉さまたちの目が嬉しそうに細まりました。蛇のように長い舌が、乳輪の辺りから巻き込むように、乳首を舐め回し……唇と歯で扱き上げていくのです。

「んんんおおおおおおっ♥ お、お、おひい、おひりいっ♥ お尻いっ……い、いいっ……い、いいですうっ♥」  
「ほらあ……メデューサのケツ穴からあ……いやらしい音お、聞かせてよおっ♥」  
「んんんくうっ……んんんおおおっ♥ あひい……いっ♥ だ、だめえっ……んんんくうううっ♥」









そうして……上姉さまは、私の口にチンポを押しつけてきました。下姉さまは、私のチンポをしゃぶり始めました。

「んっ……ほらあ……包茎チンポの皮の剥き方はあ……自分のでえ……分かってるでしょお？」  
「は……はいっ……んんっ……こ、こう……です  
ねえっ……」  
「そっ……そうよおっ……んんっ……う、上手い  
じゃない……いいわよお……そ、そお……し、舌あ、  
さ、差し込むのお……そ、それえ……い、いいっ……  
いいわよおっ……」

先汁がどびゅっ……と溢れました。  
私は舌先に力を込めて、姉さまの鈴口をチロチロと舐めます。  
途端、上姉さまが身体を震わせながら、興奮しているのを感じました。

「んんひいっ……い、いいっ……こんなあ……短時間でえ……ふえ、フエラあ……上手くなつたじやないっ……うふふ……いいわよおっ……乱暴にヒン剥いてえ……それでジュルジュルしちゃつてえっ……」  
「え……あ……い、いいのですかあっ……」  
「うふふ、したかったんでしょお？ 私の、ステインのチンポを舐つてみたかったんでしょお……いのよお……今日はあなたの誕生日だからあっ……」

でも……姉さまの反応が恐かったので、皮を剥くまではゆっくりしました。  
私と同じように、こつてりした恥垢がこびりついていて……私は新しい興奮を覚ええました。

「んっ……やあっ……よ、汚れてるう……私のお……汚れてるわよおっ、エウリュアレえっ……」  
「え……あんっ……そ、そうなのお……うふっ……メデューサに……舐め取って貰うのお……いいわよ  
ねえっ……」

下姉さまは、陰茎の付け根からチンポをしゃぶつていきます。  
最初は、舌先でしたが、やがて舌腹でねっとりとしやぶり回すようになってきます。  
バキバキに勃起したチンポに、この刺激は気持ち

よくて……先走り汁を、どくんっ……と漏らしてしまします。

「んふうっ……出たあ、とろおつて……メデューサのお先汁うっ……甘くてえ……好きよおっ……」  
「あっ……んんんっ……し、下姉さまあっ……い、いいっ……いいですうっ……」  
「メデューサあ、ダメよおっ……ステインのおしやぶり続けるのおっ……ほらあ、チンカスう、舐め取つてよおっ……」  
「は、はいっ……んふうっ……んちゅっ……んちゅうっ……あうっ……こ、濃いですううっ……んんふっ……す、好きいっ……濃いのお……す、好きいっ……」

上姉さまは、私のことを見下ろしながら、熱っぽい視線を向けています。  
それは、私もしたことのある表情で……どんどんチンポの快楽の虜になっていく証候でもあります。  
上姉さまも……私みたいなあ、チンポバカになってしまおうのでしょうか？

「な……なつちやうわよおっ……こ、こんなのお……き、気持ち……いいんですものおっ……も……もつとお、か、雁首の……方もおっ……んんんっ……」  
「ステインお……そんなに嬉しがっちゃうあ、ダメよおっ……わ、私にも、ひ、響いちゃうわよおっ……んんっ……んんんんっ……」  
「エウリュアレだつてえ……そんなに嬉しそうに、味わわないでえ……口の中が……バカになっちゃうわあっ……口の熱さだけでも……すっごいのに……そんなあ濃いのおっ……」

双子の神である姉さまたちは、共感能力を切断することはできない。だから、互いに違うことをしても……一緒に感じる事ができます。  
だから……私がしゃぶっているのは、上姉さまであり、下姉さまなのです。  
私をしゃぶっているのも、下姉さまであり、上姉さまなのです。

「うふふ……一回で、二回美味しいんだから、嬉しいわよおっ……」  
「そうそう……出来の悪い妹をお、こうやってえ

……し、舐けられてるんだからあっ……」

姉さまたちの快楽は互いの中  
で増幅させられて……私への責め  
として転化されていきます。

「んんっ……んんふっ……も、もつとお……そ、  
そうおっ……そ、それえ……い、いいわよおっ……  
う、裏筋もお……敏感だけれどお……か、皮をお……  
も、もど、戻してえ……そ、そおっ……それでえ……  
チューチューしてえっ……」

上姉さまのチンポの包皮をひっぱりゆつくりと唇の中で咀嚼するように吸い上げると……大量の先走り汁が、私の口の中に吐き出されます。  
その先汁を唾液と捏ねてから、包茎のままの姉さまのチンポの中に……亀頭と包皮の間に舌を差し込んでグルグル……ネチヨネチヨ……クチュクチュ……

「んんひいひいひいひいひいっ……い、いいっ……い  
いっ……な、なに……い、今のっ……今  
のおおっ……」  
「ん……んんふうっ……んんふうっ……だ、ダメエ  
よおっ、め、め、メデューサあ……お、おいた  
があ、す、過ぎるわよお……んもおっ……」

下姉さまは、私のお尻に指をかけました。  
私は身体を震わせて、肛門陵辱の快楽を受け入れます。

「んんおおおおっ……ま、またあ……ま、またあ  
……お、おし、お尻いっ……お、お尻い……い、い  
じ、いじめらうっ……」  
「そうよおっ……ステインのお、チンポに、すっご  
いい、お、おいたあ……しちやつたあ、わ、悪い  
……バカなあ、い、妹にはあ……こ、こ、こんなあ  
……罰を与えるわあっ……」

下姉さまの指が奥まで入り込んで、そのまま直腸壁を突き出すように動き回ります。  
私は、上姉さまのチンポをしゃぶっていたのですが……そ、それが、できないほど、激しい快楽に狂っていました。













そして、驚く。  
でも、私の様子から驚きを隠して、もう一度話しかけた。

「あ、あのさ……やっぱり、その服、返そうって思うんだけれど」

「さ、桜から電話があつて話したんだよ、ライダーの……その、感覚がおかしいって……」

「……」  
そうでした。  
サーバントの夢は、マスターに伝わるのです。

「だから、キャスターに俺が交渉するからさ」

「……いいえ」

「え……でもさ」

「いいのです……シロウ」  
「そ、その……何か具合が悪いことで……あのキャスターが利用しているんであれば」  
「いいのです」

「そう」  
分かった。

あの女は何も知らない。  
姉さまのことも。  
私のことも。  
私の独り相撲だ。

「で、でも……ライダー、顔色悪いし」

「大丈夫……そう……大丈夫です」

再び……姉さまの声。

『素直になりなさい……うふふっ♥』

「そうだな」

シロウに……甘えてもいいのだろう。

「一つだけ……お願いが」

「え……俺でできることなの？」

「シロウでしかできないことです」  
「そ、そうなの……」  
私はシロウに腕を伸ばしました。

でも、シロウは怯えもせず、黙っていました。  
私は……そのような男を知りません。  
あのシンジでさえ、私の正体——メデューサであることを知った時には、怯えたのですから。

「シロウ」  
「え……あ……な、何……」

「抱いて……ください」  
私はシロウの答えも待たず、シロウの胸に抱きつきました。

「答えなど……待ってられないから」

「ちよ、ちよ……あ……の……」  
黙って……このままでいいのです

姉さまの溜息が聞こえた。  
でも、そんなのは幻聴だ。  
それでも……私は明日のために、この微かな温もりが欲しかった。

「で、でも……さ、桜が……」  
「分かってはいます……それでも、今の私には、この行為が必要なのです」

サクラには、マスターには気付かれてしまうかも知れない。そして、それは酷い結果を生むだろう。また、おぞましいほど発憤しきったマスターに従い、人目に付くような場所で痲痺を繰り返す——

「あ……あのさ……」  
「私は……どんな罰でも受けます」

「い、いや……そ、それは……いいんだ。その……多分、みんな帰ってくるのは、遅いだろうから」

「その……みんな、ランサーの所に行ったんだよ、打ち合わせのために。俺は……その、ほら、裏方だから、問題は無くて」

「……」  
「で、でさ、ま、まだライダーの意志は保留にしている……だ、だから」

「ああ……どうして、あなたはそんなに優しいのか」

「……」

「……」

「……」

そう言えば、私は男を知らない。海神だけが、私の知る男だ。私を形作るものに、男は存在しないのだから。

「分かってはいるのですか……シロウ？ 私を抱く、私に抱かれるってどういう意味が……？」

「あ……い、いや……桜は、怒るだろうなあ」  
「そうでは無いのです」  
「私に抱かれるというのは——食われるということ。人身御供になるということです」

「あああ、いいじゃない……この子、きつと美味しいわよお♥ うふふ……さあ、自分の血に素直になりなさいよお」

私は姉さまの声を振り払おうと、頭を振った。  
だが、その行為はシロウを心配させるだけだった。

「ライダーが困っているなら……俺は助けたい。確かに、俺の好きな人を裏切るかも知れないが……その人だって、君のことを大切に思っているだろう？」

「……シロウ」  
それは、そうだが……私は、それで救われるのだろうか。

姉さまの嘲笑が聞こえる。

『見てよ、エウリュアレ……この娘ったら、自分で抱いて欲しい。って言うっておきながら……自分は救われるか……ですって』

「ほーんと……バカね。不器用すぎるわ……さっさと食べちゃっていいのに。相手の男は、それぐらい、平気だと言ってるんだから」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」



それに、キャスターの言葉に惑わされたとはいえず、それで……ライダーに迷惑を掛けていているなら」

そうだった。

この男はいつでもそうだった。常に自分が犠牲になれば済むと思っっている。何という自己中心。

『あなたにそんなことが言えるの、メデューサ？』

そうだった。

私もそうだった。私も……何と自己中心。

『昔を思い出したのです』

「へ……？ ああ、さつきまで寝ていたみたいだったから、夢でも見たの」  
「そうです……だから、今、シロウに抱かれない」  
「あ……う、うん……いいよ」

シロウは私の身体を抱きしめてくる。

まだ、身長が伸びきっていないシロウでは、私の方が見下ろす格好だ。でも……何だろう。私は、確かに抱かれていますという実感を覚えている。

『うふふ……上手いじゃない、その子』

『メデューサには勿体ないわねえ……うふふ♡』

姉さまたちが、ニヤニヤしながら、私の周りで囁いている。もう少し……ああ……もう少し、この世界が……私の住んでいた場所に近ければ……きつと、このふたりは私からシロウを取り上げようとするだろう。

『バカねえ……あなたのモノは、私のモノ。私のモノは私のモノよ』  
『まったく……こんな単純なことも忘れたのかしらあ……可愛そうなメデューサ』

止めて欲しい、今、その名で呼ぶのは、

今の私は、シロウの知るライダー。

ギリシャ神話のメデューサ。女系部族の戦士にして、指導者メデューサではない。

「あ……ら、ライダー……」  
「こんな格好ですものね……奉仕します」

私は跪いてシロウの股間に顔を寄せる。私の正体を知る前のシンジは、こんなことを積極的にさせていた。そして、それはたまたまなくイヤだった。

『そおねえ……あのワカメくん、チンポはでかいけど、全然早かったものねえ……』

『まったく……実体があつたら、あのワカメくんのケツ穴に手をつ突っ込んで、狂わせて上げたのに……うふふ』

姉さまの戯言には付き合えない。

私は、シロウに集中する。  
姉さまたちが、シロウと観察している中……私は、シロウのベニスを口だけで引っぱり出して見せる。

「うあつ……ちょ、ちょっとお、か、過激……過ぎるよおっ！」

「そうですか？ 殿方は喜ばれますよ……ふふふ、まだ勃起していませんね」  
「そ、そりゃ……い、いきなりだから……あつ……ああつ！」

私はシロウのモノを口に咥える。

シロウのは、嫌な感じがしない。私の中にある牝の気分が……私を高めていく。

「ふふふ……こんなに感じるなんて、最近ご無沙汰ですか？」

「え……い、いやあ、そ、そんなことは……」  
「いいえ……ご無沙汰でしょう？ ほら……こんなに固くなつて……うふふ♡」

私は、シロウのモノを丹念にしゃぶり回す。ドクドクと血の流れが、私の舌先に感じる。

『ふふふ……かぶつってやつちやいなさいい♡ 男のシンボルから吸る血は格別なのよお』

『でもお……あなたみたいに不器用な女は、謝つて噛み切つてしまふかも知れないわねえ……うふふ』

♡

そんなことしなくても……シロウから快楽を得る方法は幾らだつてあるのだ。

姉さまの声に惑わされる必要はない。

「あ……ああ……ら、ライダー……す、すっごいよ……き、気持ち……いい」  
「ふふふ……リンやサクラ、ましてやセイバーではここまでしてくれないのでしょうね」  
「い、いや……や、やつてつて言えば……や、やると思うけど」

「その中で積極策を採りそうなのは、リンですが、そのリンも追いつめられないとしないでしょうね」

「わ、悪いけど……その……」  
「そうでした。私としたことが……他の女の話をして、シロウを萎えさせる必要はありませんでした」

分かつている。

これは拱発。  
シロウが……本当に私のことを抱いてくれるかどうかを知るための。

そして、分かつた——『そうね、優しい人ね……その人は、あなたのマスターになつてくれれば、私たちも安心なのにねえ』

「シロウ……どれくらいできますか？」

「へ……あ、そ、それは……ご、ご無沙汰だから……その……さ、三回ぐらいは」

「結構……その数は欲しいと思つていました」

私は、それ以上語らず、できるだけ淫らにシロウのベニスを吸つていく。  
もう……姉さまの声も聞こえない。

「ううっ……ら、ライダーあ……」  
「んくうんっ♡ し、シロウのお……チンポお……美味しいですよ♡」

「あ……あうっ……そ、そんなあ……い、いやらしい言葉……ああつ！」

「ふふふ……こつちも……キンタマも舐めて欲しいのでしょお？ そうしながら……手扱きをして……あげますよ」





シロウの指が、私の乳首を捉えます。そして……  
ゆっくりと乳房の中に押し戻すように、乳首を責めていくのです。

「んんくうんんっ♡ い、いいっ……いいですよおっ♡ あっ……あああっ♡ こ、こういう……せ、責めはあ……は、初めてですうっ♡」  
「何だか犯されている気分だろ？ まあ、君のマスターが教えてくれたんだけど……やっぱ、胸が大きくないと、こういうのは楽しめないから」  
「うふふ……そんなこと言っているとお……他のふたりから殺されますよ？」  
「……ナイショだよ」  
「分かっていますよ……んんくうんんっ♡」

そうして、私とシロウは唇を重ねる。  
汗ばんできた。受肉しているせいだろう、汗ばむと途端に自分が牝だということを思い出す。  
実際、シロウも私の体臭を感じて……興奮していた。何度も何度も鼻を鳴らしながら、私の髪の中に顔をいれ、呼吸している。

「は、取ずかしいですね……そんなに匂いを嗅がれるのは……」  
「あ……いやかい？」  
「イヤでは……ありませんが、やはり取ずかしいです」  
「そっか……でも、ライダーの匂いって、本当にいい匂いだなあ。何だか……甘い匂いがする」  
「もしかすると……毒かも知れませんが」  
「ああ……きつとそうだな。ライダーの汗の匂いを嗅いでたら、もう我慢できないくらいだよ」

私のお尻にシロウの勃起したモノが擦り付けられます。  
さすがに、そうして汚されるのは本意ではありません。もつとしっかりとした形で、陵辱されたいのです。  
私は、スカートを持ち上げ、足を開いて後ろからシロウを受け入れることにします。

「ああ……ライダーのお尻だ」  
「ん……そ、そんなに、興奮してしまっただのですか？」  
「うん……こうやって……我慢できなくなるのって

……久々かも」  
「ふふふ……嬉しいですね。私に、そんなに欲情してしまうなんて……」

私は更に腰を落とし、シロウが私の下半身をオモチャにしやすいよう、広げます。  
「大胆だなあ、ライダー」  
「私も……発情してしまっていますから」  
「そうそう。淫乱なんだから……しようの無い娘よねえ♡」  
「まったく……でもお、この男の子も……可愛いわね。メデューサには勿体ないわあ♡」

姉さまたちの気配が再び強くなる。  
でも、今、ここにいるのは、私だけ。  
私と、シロウだけなのだ。  
「ら、ライダー……い、挿れたい……挿れたいよ！」  
「まだ……まだですよ。もつと……私を楽しんでください。その程度では、私を楽しんだことにはなりませんよ」  
「う……ううっ……」

シロウは、私の股間に手を伸ばします。  
そして、下着の上から私のクレパスをぎゅつと擦り上げていくのです。  
「そ……そお……ですっ♡ そ、そう……いうのがあ……い、いいのですっ！」  
「こ、これくらい……乱暴な方がいいの？」  
「……んんっ！ そ、そうです……もつとお……は、激しくうっ♡ くうんんんっ♡」  
「じゃあ……もつと責めてあげるよ」

シロウの手が私の性器そのものに触れてきました。  
ゆっくりと膣内へと指が入り込んでいきます。  
私は、思わず溜息混じりの喘ぎを漏らします。  
こんなにも激しくて、でも、こんなにも優しい指使いの股方を久しく知らなかったからです。

「も……もつとお♡ もつとお……せ、責めて……ああっ！ くうんんっ……い、いいっ♡ いいですうっ♡」  
「うん……すっごく感じてるね。こんなに濡れてる

……それに、ここも、こんなに腫れて」  
「んひひひひひっ♡ い、いいっ……い、いいっ♡ くうんんっ♡ く、くり、クリトリスうっ……いいっ♡」

シロウの指が私の敏感な突起を摘みます。  
それから、包皮を剥き上げ、そのまま直に指がつまみ上げていくのです。  
「コリコリだよ……ほら」  
「あっ♡ あっ♡ ああっ♡ んんくうんんんひっ♡ い、いいっ♡ いいですうっ♡ んんんひひっ……も、も、もつとお……もつとおっ……」

シロウの左腕が服の中に入り込んできます。  
そして、そのまま乳房を、乳首を直に握めていきます。  
乳首と、クリトリスの同時攻撃に私は髪を振り乱して悲鳴を上げました。  
「あらあら……メデューサったら、そんな程度でそんな声を漏らしちゃって♡」  
「感じてるのねえ……うふふ♡ 早く私たちも楽しませて欲しいわあ♡」

姉さまたちを楽しませる余地など、何処にあるのでしょうか……今、私はあなたたちを忘れるためにシロウに抱かれていますから。  
「あ……ううっ♡ い、いい……いいですうっ♡ し、シロウ……だ、抱いて……は、早くう……わ、私をお……お、おか、犯してえっ♡」  
「あ……ああ……わ、分かっているよ」

私はシロウの前で、足を広げます。  
既に下着は外され、陰部を晒している状態です。  
「ライダー……もつと……していいか？」  
「え……あああっ！ し、シロウうっ……んんくうんんんっ♡ んんんっ♡ んんんっ♡ ああ！ そ、そんなに……そんなに……な、舐めたら……ああああっ♡」

シロウは……派手な音を立てて私の股間を、オマ

ンコを吸い上げていくのです。  
私は悲鳴を上げて、シロウの頭を掻きむしってしまします。

「うわあ……いい、痛いよお、ライダー。そ、そんなに、感じちゃったのお？」

「だ……ダメですう……き、気持ち……いいんですっ♡ な、舐められるのは……凄く……興奮しますう♡」

姉さまたちは、あまり舐めたりしない。  
そう……無理矢理両性具有化して、私のことを馴っていたから、こういうのは結構苦手だったのかも知れない。

「うふふ……だったら、今度はたっぶりクンニリングスしてあげるわよ♡」  
「お尻の穴と交互に、ふやけて皮膚が破れるぐらいまで、舐め回してあげるわ……うふふ♡」

ああ……また姉さまたちの声。  
でも、今はシロウがいます。

これから、夢で姉さまたちに犯され、今の言葉通りの責めを受けたとしても、私は我慢できるのです。

「ああっ♡ し、シロウ……もお……もお、いい、いいですよっ♡ は、ハメて……く、下さいっ♡」  
「ああ……いいよ、さあ……足を開いて……自分で、おねだりしてみよ」

シロウは、私から身体を離し、全裸になりました。  
ああ……何度か見ていますが、今、こうしてみるとギリシヤの男を思いつくような端正な身体をしているではありませんか。

「そうかしら？ それよりも、もっと可愛いわよおっ……うふふ♡」  
「そうね、ステンノ、大体アイツらギリシヤ人は包茎なのがダメよねえ……うふふ♡」

姉さまたちの淫猥なるひそひそ話を無視して、私はシロウの前ですべてを晒します。  
「あ……し、シロウ……いい、いや、いやらしいい

……わ、私のお……おま、オマンコにい……あ、あなたのお……た、遅しいい、ち、チンポお……ね、ねじ込んで……下さいい♡」

シロウは、それを聞きながらうんうんと頷き、私の方に近寄ります。でも、割れ目に添えるだけで……まだセックスには至らず。

「さあ……もつと言つてよ」

「あ……わ、私のお……おま、オマンコお……お、おか、犯してえ……す、好きだけ……あああ♡  
好きなだけえ……さ、ザーメンをお、な、な、流し込んでくださいっ♡」  
「よくできました」

そうして、シロウは私を抱き寄せ、キスし、唇と舌で、私の口を蹂躪してから、ペニスをヴァキナの中に埋没させたのです。

「くっ——んんんんんん♡ あああああああ来たあ♡  
「あううっ！ ら、ライダーあ……し、しめ、締め付けえ……す、すっごいよっ！」  
「ああ……す、すみ、スミマセン！ で、でもおっ……でもおっ……もお、こ、これ……ぐらいでないとおっ♡ あああああ♡」

私の中は、もう私ではどうしようも無いほど、欲情しているのです。その中に、シロウが入ってきたのは……可愛そうですが、我慢して貰うしかありません。

「くっ……んっ！ こ、これだと……す、すぐに、イッちゃうよ……」  
「い、いいですよ……か、か、回数う、こ、こなしで……ただけるのでしたらあ♡」  
「うう……そ、そうだなあ、三回つて言ったけど、よ、四回戦必要かもね……」

ああ……♡ あああ♡

シロウ、なんて、あなたは、優しいのか。  
私は、シロウの身体を抱きしめます。  
でも、私の方が大きいのですから、つい力が入ります。腕だつて余ります。緩んだ欲情の輪の中で

……私は空しさを感ずるのです。

「大丈夫……ライダー、ほら」

シロウは私の身体に自らを寄せていきます。  
そして、またキス。

「んんん♡ くっんんん♡……んんん♡  
ふうっ……んんん♡ し、シロウお……シロウっ……くっん♡」  
「そんな切なそうにしないで……今は、楽しいだろうか？」

そう……かも知れませんが。  
今の私は……幸せなのかも知れません。

「ホント……羨ましい。でも……」  
「これは仮初めよ……分かってるでしょ。私たちが、喰らった。罪は消えてないのだから」

そう……人が、霊長が、この世界を維持し続ける限り、私はその罪を背負い続けるのです。

「ら、ライダー……もお、い、一回イッちゃうけど……い、いいか？」  
「ど、どうぞお……ああ……だ、出してえっ♡ 出してえっ♡ 思いつきりいっ……出してえっ♡ あああん♡」

私は姉さまの声を掻き消すために、悲鳴のような懇願をしました。でも、最後まで姉さまたちの声は私の耳に響いていたのです。

それは、シロウが私の中で絶頂舌瞬間、微かに聞こえたような気がしました。  
それから、もう姉さまたちの気配は私の中から消えていたのです。

「メデューサ……可愛そうな娘、でも、だから、あなたのこと、愛しているのよ」

それは……多分、本当のことでしょう。

でも、だからと言って、私に……今の私に何ができるでしょうか。私は……ただ、自分の罪を背負い続けるしかできないのですから。

【END】



こんにちわ。武藤礼恵です。

今回は冬コミ限定版に加筆&挿絵追加でお送りしました。

前回は時間が無かったので、最後のシーンに士郎とのセックスシーンが挿れられなかったのです。まあ、無くてもいいようにテキストは調整していたつもりですが、本当ならこのシーンにも挿絵があるべきなのですが……まあ、そこはやっぱり時間的制約と言うことで、ごめんなさい。

さて、アニメの方ではライダーさんが、ご退場してしまい、個人的な欲求としてのキャス子さんのみが楽しみになっている次第なのですが、シナリオが順当にセイバールートに入っているので、どうなるのかなーと思いつつ、桜ルートはどうするんだ！ とか、キャス子さんはもう我様に串刺しになるところで終わりか！ とか、そんなことばかり心配しております。黒桜出ないのかなー、出そうな気配はバリバリですけど。

まあ、セイバールートをベースに各シナリオのいいところを回収していただければいいかなーと。そうすると！ キャス子さんが、あれですか中盤の敵って感じですか！ そうですか。でも、イリヤがいるからなー、後半になるのかもなー。まあ、せっかく人気投票10位記念ということで。

ホロウをやってから向こうすっかりキャス子さんは面白キャラクターなので、エロ本は作りませんって感じですが、どうなんしょうかね。ギャグに需要はあってもエロに需要は無いような気がするー。

まあ、それぐらいで。次回はサンクリですが、多分オリジナルかなー。

時間的制約により、表紙のみかなー。たまには普通にオリジナルなど書いてみよいかと思う次第です。では、また。

■ おくづけ ■

発行：楓のはらわた

著者：おおたけし&武藤礼恵

2006年4月2日発行

印刷：ニモ印刷工房

■ 連絡 ■

<http://www.kaede-no-harawata.com/>  
code:erokawaii



愚

神

楓のははすわた

よよたた

2006 Spring

礼

賛